世の人々へ（番外編）

－ある『負け組科学者』の随筆集２－

著：江澤　潔*[1]

(2021/03/31)

1　元科学研究者 (ORCID: 0000-0003-4906-8578); 宛先: 〒368-0051 秩父市中村町 3-1-33 ; Tel & Fax: 0494-22-5501 .

はじめに

江澤　潔　[手書き：2021/01/25；　電子文書化：　2021/03/20]

この著書、「世の人々へ（番外編）：ある『負け組科学者』の随筆集２」、は、筆者が埼玉医科大学付属病院の精神科に入院していた時に書き溜めた手記のうち、学習にあまり関係のないものを集めて綴ったものである。

姉妹著、「世の人々へ：ある『負け組科学者』の学習ノート」、と共に読めば、筆者が精神科に入院中に行なっていた思考／思索活動がかいま見えてくる（そして筆者は精神的に病んでなどいない事が解る）であろう。

　一方、これは前著、「ある『負け組科学者』の随筆集」、の追加補足と見なす事もできる。前著とこの著書を共に読めば、筆者の、昨今の社会問題に対するスタンス、とりわけ、「『母なる地球／自然』の使者」の立場からの考え、をうかがい知る事ができる。

前著同様、この著書も、決して感情的になる事なく、あくまでも客観的で冷静かつ論理的に読み進んで頂けたら幸甚である。

　その他、「ある『負け組科学者』の人生の記録」で載せられなかった、私の高校時代および大学時代の思い出の幾つかもここで載せてある。これらは筆者がどんな人生を歩んできたか、をかいま見せてくれるであろう。

　末筆ながら、この著書を制作および公開するにあたり、協力してくださった皆様方、特に、一部タイピングを手伝ってくれた我が姉康子（現姓、内田）をはじめとする私の家族および埼玉医科大学付属病院の精神科の皆様方、にこの場を借りて心より感謝の意を表する。

２０２１年1月25日（月）

江澤　潔

目次：随筆集２

（＊は特に読んで欲しい随筆）

2020年10月30日

江澤　潔　[手書き：2020/12/01-02; 電子文書化：2021/03/20]

2020年10月30日（金）、早朝、私は「最後の一歩」を踏み出す為、（朝５時ごろ）家を出て、公園橋を渡り、ミューズパーク北口へ入った。その前夜は、「しあげ」と準備に思った以上に時間がかかり、一睡もする間もなかった。本当は、もう１日延期したいところであったが、既に（前日の夕方）文科省、NHK、朝日新聞社宛に「声明文」を（速達で）郵送していたので、決行せざるをえない。

ミューズパークでは、車道から少し分かれたハイキングコース（？）で、あまり勾配のきつくない場所を探したが、歩道の脇に木が一本生えた場所の手前が一番落ち着きが良さそうだったので、そこに座った。用意した出刃包丁、牛刀（？）、そして「予備」様の少し大きなカッターを、リュックから取り出した。

まず、予定通り、出刃包丁で割腹しようとした。さすがに「これで最期」と思うとビビッて、多分２０～３０分くらい包丁を眺めていたが、意を決して、包丁の刃先を腹に当てて思い切り押したが、何故か刺さらない。２、３回繰り返したが、結果は変わらなかった。

この、「予想外」の展開に、気が動転したが、「何はともあれ、死ねばいいんだ」と思い、牛刀（？）を左首に当てて、頸動脈を狙って刺そうとしたが、ここでも刺さらずまた、どこに当たっているかもよく見えないので、本当に（刃先が）頸動脈に向かっているかどうかも定かではなかった。それでも刃を強く押し当て続けると、ようやく首から血が流れ出した。そこで、同様にして右首も切った。ちょっと（血の流れる）勢いが弱かったので、続けて、カッター、それから出刃包丁を押し当てると、傷はさらに広がった。（血の出る）勢いもかなりよくなって来たが、思っていた程ではなかった。（後で判ったが、どうやら動脈には達していなかったらしい。）

それでもかなり血が流れ出始めたので、このまま待てば失血死にはなるかも知れない、とは思った。途中、血の流れの勢いが悪くなったが、傷をふさいでいる血の塊を拭い取ると、また勢いよく流れ始めた。

それからしばらくして、小便をしたくなり、立ち上がろうとしたら立ちくらみがして、崖下に少し転げ落ちた。必死に這い上がって用を足し、それから元の所に戻ってまた

座った。この頃にはだいぶ気分も悪くなり、もうしばらくすれば「お迎え」がくるかな、と思った。

しかし、その後、出血が止まり、血の塊を除いてももう血は流れなくなった。そこで、新たに出血させる為、（多分）カッターで左手首を切ったが、刃が鈍いせいか、薄皮一枚切れた程度でほとんど出血しなかった。そこで、下半身の方が良いだろうと思い、大腿部および足首付近の動脈を探したが、脈を打っている箇所が見つからなかったので断念した。いずれにせよ、このままでは（既に予告してあるように）「割腹自殺」にはならないと思ったので、牛刀（？）の刃を上向きにし、取手側を木の幹に当て、それに覆い被さる様にして、刃先を腹に当て、思い切り体重をかけたが、やはり刺さらなかった。

このままでは死に至らないかも知れない、と思い、「次のプラン」を考え始めた。

A）飛び降り自殺、、、死体の捜索にあまり人手や手間をかけて欲しくないので、やるとすれば、展望台か公園橋まで移動する必要があるが、今の「血まみれ」の姿では、行き交う人々に怪しまれ、通報されてしまう。

B）首吊り自殺、、、少し長めのタオルを持って来ていたので、それを木の少し太い枝に引っかければ、出来なくもないかも知れない。そう考えて、周囲を見回したが、おあつらえ向きの木（の枝）は見当たらなかった。（やはり遠くへ移動すると、怪しまれ通報されてしまう。）

C）家へ帰ってやり直す、、、もうお昼近くになってるので、家にたどり着く前に見つかって通報されてしまう。

こんな訳で、「にっちもさっちも」行かなくなり、１～２時間ほど途方に暮れていると、警察に見つかり保護され、秩父市立（？）病院で手当てを受けて、埼玉医大付属病院の精神科に入院させられた。

［今回の反省点］

反省点は二つある：

1）「最後の詰め」を焦り過ぎ、十分な準備が出来なかった事；

2）「人間はもっと簡単に死ねるもの」と甘く見ていた事。

どちらか一方さえきちんとやっていたら、私の人生は（望み通り）あの時に終わっていたであろう。例えば、出刃包丁もしくは牛刀の<u>刃先を</u>もっときちんと研いでいたら（事前に研いではいたが、刃先でなく腹を念入りに研いでいた）、あるいは、もっと細長い、刺身

包丁を使っていたら（途中で欠けるリスクがあると考え、今回は使うのを差し控えた）、もしくは、カッターの刃を鋭いものに更新していたら（時間が押して、焦っていたので更新しなかった）、、、、あの時で、すべて終わっていたのかも知れない。

　今回、失敗してしまった事により、新たに何人もの人々と知り合うこととなり、結果として、本来ならばそうしなくてもよかった人々まで「悲しませる」こととなってしまう。これは非常に心苦しいことであるし、すべて、私が「１回目」を失敗したせいである。
、、、この償いはきっと、地獄でさせてもらおう。

[追記 2020/12/02:
これから何があっても、特定の個人を責めないでください。一番悪いのは、（生死に関して）個人の自由を認めない、現代日本の社会制度そのものなのですから、、、。
]

もう『ゴキブリホイホイ』は要らない（!?）

～ゴキブリ達と“おさらば”するもっと優しい方法～

江澤　潔 ［手書き：2020/11/29; 電子文書化（by UY）：2021/01/30］

唐突だが、私は『ゴキブリホイホイ』（および類似の他社製品）は嫌いである。ゴキブリ達を好きな匂いでおびき寄せて、トリモチの様なネバネバする物質で囚え、ゴミ箱にポイする。そして、その最後には大抵、ゴミ焼却炉でゴキブリ達は「火あぶりの刑」に処せられるのである。それにトラップされるのがゴキブリではなくて我々人間だったら―と想像したら、それが如何に残虐な行為であるかよく解ると思う。

　思えば、古今東西、人間は、こういった「おびき寄せて、皆殺しにする」類いの装置が好きで、たびたび発明して来た。

　たとえば、誘蛾燈。これは蛾などの夜行性昆虫が光に引きよせられる性質を利用し、光で飛翔型昆虫をおびき寄せて、高圧電流でショック死させる。虫達は、まさに「飛んで火にいるなんとやら」のごとく、エジキとなってしまうのだ!!

　もっと旧式の「装置」としては、冬に入る頃に松の木の幹などに巻く「こも」がある。冬眠の準備をしようと木から下って来た毛虫などがその中に入り冬眠し、彼らが冬眠から目覚める前に「こも」を木からはがし、火にくべてしまうのである。

　こういった、残虐な方法ばかり思いつき、実行して来た人間どもが、いくら「世界平和」を声高に叫んでも、戦争やその他の残虐行為はこの地球上からなくなりそうにない様に思えるのだが、ひょっとしたら、それは単に昔から決まった「考え方の枠組」に囚われてしまっているせいであり、その「枠組」を取っ払ったら、あるいは、全く新しい「枠組」に置き換えたら、

人間たちはもっと優しくなれるかも知れない…。

…そこに私はいちるの希望を掛けてみたい。

かく言う私も、小学生の頃は周りの児童とさほど変わりなく、昆虫や蛙をつかまえては殺して解剖したり、ザリガニ釣りの餌にしたりしたものだが、そういった残虐性は歳を重ねるごとになりをひそめ、今では、血を吸いに近づいてきた蚊を叩き殺すのもためらうくらいである。

…そう、たまに見かける「虫も殺さぬ（様な）」といいう表現は、まさに私の為にあるのだ!!

　そんな私が、秩父のアパートで暮らしていた２年間は『ゴキブリホイホイ』などに頼らずとも、ゴキブリをほとんど見ずに生活して来た。

［正確には2，３回目撃したが、いずれも単体で、ゴミ袋などで捕獲して、窓もしくは玄関から外に逃がしてやった。］

そこで、この方法を伝授しよう。

　そもそも「何故、ゴキブリ等が民家、とりわけ台所に出現するか？」を考えれば、答えは明快で、「そこに、彼らが求める物（生ゴミ、食べ物の食べ残し、むき出しの食材、etc.）があるから」である。したがって、ウラを返せば、

「彼らが求める物がなければ、（あるいは「見えなければ」、—もっと正確には「匂わなければ」）、彼らはそこに居る理由がないから去っていく」

という事になる。

　その為にまず考慮すべきが、生ゴミの扱いである。私は流しに三角コーナー（もしくは「三角コーナー要らず」も）置かないで、生ゴミはできる限り、ポリ袋に入れて、冷蔵庫の冷凍室に保管し、ゴミの日に出した。

また、汁物はできるだ作らず（しかしみそ汁やスープの素の粉末を調味料代りに使うことはある）、作っても、消費しきる様にした。（缶詰の汁などは、紙に吸わせてポリ袋に入れて冷凍した。）

そして、どうしても流しに流さねばならない場合も、食器洗い用洗剤を十分に混ぜてから流した。

そして、排水口にとりつけるネットはこまめに取り換えた。

（私の場合、週に２回だが、普通の家庭では毎日換えた方が良いかも。）

また、（缶詰やパック入りごはん等の保存食以外は）できるだけ食材は買い置きせず、冷蔵庫に入れてもすぐに使い切る様にした。（これで、「食品ロス」に伴う大量の生ゴミ発生が防げる。）

（ちなみに、これは本題とはあまり関係ないかも知れないが）

私は台所掃除の手間を省くため、油を使った材料は一度もせず、水で煮るか、蒸すか、電子レンジで解凍／あたためするかで、済ませた]

また、乾燥食材が残った場合は、入れ物の口を十分に封をした上で、ZIPLOCK 等に入れて密封し、匂いなどが外に漏れない様にした。

　　これにより、少なくとも２年間はゴキブリ等の「害虫」にほとんど遭遇する事なく過ごす事ができた。

これを一般家庭で実行する場合、まず、

台所や食材貯蔵室等の「大掃除」をして、彼らの卵や死骸や「彼らが好きそうな物」をすべて撤去する必要があるかも知れない。また、私は間食等はしない主義なのだが、間食をよくする家庭の場合は、

・間食を取った後によく掃除し、出たゴミはそのままゴミ箱にポイせずに、ポリ袋に入れて冷凍室に保管する。

・残った物は、匂いが外に漏れぬ様によく密封する。

等を注意する必要があろう。

もし、この方法を、全家庭で実施すれば、ゴキブリ等は森林等、自分達が本来居るべき場所に戻って行くハズである。

　少なくとも現在の状況は、人間達が生ゴミ等をきっちり管理してないが為に、

「勝手にゴキブリ達を大量増殖させ、勝手に彼らを大量殺りくしている」

状況であり、そこで「無益な殺生」を量産している。

　人類は、もっと平和に「隣人達」と共存していく方法を真剣に考えた方が良い。

　なお、上記で伝授した方法は、ちょっと変えればゴキブリ以外（たとえばネズミ等）にも適用可能なハズである。

「囚われの身」

江澤　潔［手書き：2020/12/19-20; 電子文書化：2021/03/20-21］

今年（2020 年）の 10 月 30 日（金）に自殺未遂を起こして以来、私は今、とある病院の精神科で「囚われの身」となっている。

他の科や施設から鍵付きのドアで隔たれた精神科の病棟のさらに鍵付きの一室の中に閉じ込められ、あたかも動物園の猛獣か何かの様である。しかも、部屋の中のベッドにベルトを使って腰、両腕、両脚を固定されているのだ。更に、簡易心電図を胸に付けて常にモニターされている。

［当初は腰と両腕だけ固定されていたが、先日（12/15）、この拘束を解除されている間を見計らって自殺しようとしたら、それからは両脚の拘束も加わった。[2]］

[注： 12/21 以後、両脚の拘束は再びなくなった。］

この事について、私が思うところを、ここで率直に語っておきたい。

まず、私が 10/30 に自殺を測ったいきさつを手短に説明する。

2　一つ、付け加えておくと、私が「機会があったらいつでも死ぬ」と予告（警告）しているにも関わらず、病院側が拘束解除したから、私は予告通り決行しようとしただけであり、私の側に非は一切なかったと自負している。

私は数年前、私の科学者／研究者としての「最後の研究」に取り掛かる際、この研究に私の残りの人生の全てを捧げると、神々（「魔神」と言った方が正確かもしれない）に誓った。そして、研究を進めている間に、多くの人々（ほとんどは、私の昔の上司（あるいは受け入れ教官））に、その誓いのことを話し、その研究が終わったら人生を終わらせる旨を「約束」した（あるいは「宣言した」と言った方が適切かも知れない）。

その後、色々困難にぶつかったものの、今年の夏（7/30 又は 8/13）に、なんとか研究を無事、終了させる事ができた。そこで、神々（あるいは魔神）に誓い、人々に「約束」（又は「宣言」）した通り、人生を終わらせようと、10/30 に自殺を図ったのだ。

そこには、人々（特に元上司達）の望みにこれまで応えられなかったお詫びの意味も多少はあるが、最も大きな動機は、「約束」（又は「宣言」）した事を果たし、私の「誠実（まこと）」を貫く事にある。（決して、人生や将来への不安や悲観、あるいは「うつ」等の様に気に病んでいた事があって試みたのではない！！）

しかしながら、時間不足に帰因する準備不足等もあって、試みは失敗し、警察に確保 → 秩父の病院で手当て → この病院に収容される事になった。

ちなみに、私にとって、ここにこうやって「拘束」されている事自体はさほど苦痛ではない。食事は毎日３食、適量出されるし、味もそんなに悪くない。トイレの際の一時的な拘束解除も含め、健康および衛生面は看護師さん達が面倒を見てくれる。他の人々はどうだか知らないが、「拘束」自体、慣れてしまえばどうって事はない：そもそも私は10/30（金）に死んでいるハズの身であり、その後何もする予定はないから、「自由になりたい」と焦る必要もないのだ！又、「拘束」されていれば運動不足により身体は衰えていくが、どうせ「死んでるハズの身」なのだから、それも大した不安材料とはならない。（時々、拘束されていてやることもなく目が覚めている間、暇をもてあます事はあるが、それも、この２０年程の間は忙し過ぎて味わえなかった「贅沢」とポジティブに捉えることもできる。）

ただ、唯一の問題は、「こんな面倒な事をせず、早くこの世を去らせて欲しい」という事だけである。

恐らく、ここでの「生活」は、私がここに来る前の、息つく暇もなかった、生活に比べると、数倍良いのではないか？と思えるくらいである。

［もし、「拘束」に加え、ムチ打ち、水責め、電気ショック等の「拷問」の要素が加われば、私も耐え難いと思うかも知れないが、さすがに、そこまでやると明確に憲法違反になるせいか、そこまではできない様である。（まだ確定ではないが、、、。）］

ただ、先日（12/15）再び自殺しようとした際に、始めて気付いたが、私は、間違った診断に基づいた「間違った治療プログラム」を施されているのではないか、という気が最近している。

このプログラムはどうも、身体拘束に始まり、それを徐々に解除し、それはほぼ完全に解除された時点で「解放」（あるいは「社会復帰」）となる様であり、更には、「拘束」を「ムチ」、「解除」を「アメ」として利用する事により、患者の気持ち（心）を無理やり病院（あるいは医師）側の望む方向に誘導しよう、というものらしい。

これが実際に精神が病んでいたり一時の気の迷いによって自殺を図った人々だったならば、ある程度はうまくいくのかも知れない。しかしながら、既に述べた様に、私は精神が病んでいる訳でもなく、一時の気の迷いで自殺を図ったのでもない。私はただ、（「誠実（まこと）」を貫くために）神々（「魔神」）や人々に「約束」（又は「宣言」）した事を、その時期が来たから予定通り決行しようとしただけであり、それが未遂に終わった後もずっと、その「意志」は強く持ち続けているのだ。何故なら、「約束」を破るということは「ウソをつく」ということであり、（科学者／研究者としての）私の信用を失墜させることにつながるからだ。（私がこれまで５２年間生きて来た間に流した血と汗と涙がすべて水泡に帰してしまう、と言っても過言ではない。）

それに、既に述べた様に、「拘束」自体はそれほど苦痛ではないし、「解除」に（自殺を決行する機会ができた、という事以外では）それ程喜びも感じない。従って、これらが「アメ」と「ムチ」として機能していない。

更に悪い事には、このプログラムでは「解放」（つまり「終了」）前には（恐らく）必ず「拘束解除」を必要とするので、その度に私は自殺を試み、「ふりだし」に戻ってしまう事となり、二度と「社会復帰」する事はないであろう。（仮に病院側が私を「解放」したところで、私はすぐに自殺するであろうから、いずれにせよ「社会復帰」はありえない。）「ウソつきは泥棒の始まり」とよく学校で教えられた事を引き合いに出せば、私を「社会復帰」させようとしているのは、私に「約束を破れ」=>「泥棒しろ」とケシかけている様なものである。

そうなると、改められない限り、このプログラムの行き着く先は次の２通りしかない：

- 結末 A、私が病院内で自殺を遂げる；
- 結末 B、私が「拘束された」まま、何らかの他の原因で死ぬ。

この「結末」が、何日後が、何ヶ月後か何年後かになるのかわからない。病院側は、結末 A を必死に食い止めようとするだろうが、たとえそのお陰で私が仮に２０年間生き長らえて、病院で「拘束」されたまま自然死したとして、果たしてそれが本当に病院側の望む結末なのだろうか？私はただ、病院で、社会の役に立つこともなく、無為に時間を過ごしていくのだ！！そしてその間には、国民から徴収された税金と（健康）保険料が相当な額費やされるし、医師、看護師、薬剤師等の人的資源に関しても然りである事を忘れてはならない。（更に、時間が経てば経つほど、私の「唯一の武器」である頭脳は朽ちて行き、しまいには、単にエネルギーに欠け、様々な障害を抱えた「役立たず」となるだろう。）

、、、これは、寝たきり老人や植物人間状態の人々も含め、「取り敢えず命だけ延ばしておけばいいや」と多額の設備や薬剤を投入する、現在のこの国の医療体制全般に通づる問題と「根っこ」は同じ様な気がする。

私の担当医師は、「医療側としては、あなたが目の前で自殺しようとしているのを見過ごす訳には行かない」と言うのだが、、、

医療の本質的な役割は、「（病気、障害、ケガ等で）困っている人を助ける事」ではないのだろうか？

私は別に困っていない；ただ、一途に「死」を目指しているだけである。彼らが今、私にしているのは、逆に、「困っていない人を（わざわざ妨害して）困らせている」だけな様にしか私には思えない。

、、、これが本当に「医療の正しいあり方」なのだろうか？

　最後に一言。この様に「日本の医療体制のあり方」および私が現在受けている「医療プログラム」については私は物申したい事は多々あるのだが、それに携わっている個々の人々（医師、看護師、薬剤師、等々）には感謝しているし、また敬意を抱いている。私と直接関わっているのは看護師の方々が圧倒的に多いが、私が見る限りでも、夜勤／昼勤のシフトもコロコロ変わるし、土日休日に出勤する頻度も高く、本当に頭の下がる思いである。そして、高齢化社会の今、看護師たちは圧倒的に不足し、恐らくかなりの「（規定）時間外労働」を余儀なくされているであろう、と推測する。

　だからこそ、なおさらの事、この貴重な「人材資源」を、私が今受けている様な「決して成功することのない治療プログラム」に費やしていいのだろうか？と大いなる疑問を禁じえないのである。

[2021/01/30 追記：

その後、病院側は診断を改め、私は退院できる運びとなった。詳しくは「『囚われの身』最終回」をご参照頂きたい。

]

［議論］

この問題に関して、皆様のご意見を伺いたい。ただし、以下の様な意見は受け付けないのでご注意願いたい：

［ダメな意見例１］

「それでもあなたが生きる事には意味／意義／価値がある」

と情緒・感情に訴える様な文句だけの意見。

［返答］ぜひ、「何故、どうしてそう思うのか」も説明して欲しい。

（しかしながら、一つ、付け加えると、私が思うに、この様に「命の価値」を無条件に訴える様な風潮こそが、現在、地球上に人類をあふれさせ、未曾有の危機（注：新型コロナの事ではない）に直面させている主な原因だと私は思う。私が思うには、生きる事と同様、死ぬ事にも価値があるのだ！！この事に人類全体が気付けば、人類の未来に光がさしてこよう。更に言うならば、「命の価値」をやたらと叫んでいる割には、人間たちは（家畜や病害虫、病原菌等の）「命」を１日に何億も（あるいは何兆も）ルーティン的に奪っているが、一体、我々人間の命と彼らの命との間で、何がそんなに違うのか？元を辿れば、彼らも我々と同一の祖先から分かれたのに、、、。）

（もう一つ付け加えると、「生きる事」の「意味」は、後になってどうとでも付けられるので、「意味がある」と主張したところであまり 意味はない。「価値」、「意義」に関しては、「『生きる事』の価値や意義」で議論する。）

［ダメな意見例２］

「身内や知り合いが悲しむから（自殺はやめよう）」

［返答］人はいずれ、いつか死ぬものであり、それが今であろうと２０年後、３０年後であろうと身内や知り合いが悲しむのは同じである。それならいっその事、国家財政や人的資源、そして地球環境にあまり負担を欠けないうちに世を去ろう、と私はしているのだ。

［ダメな意見例３］

「あなたはまだやれる」／「あなたにはまだやるべきことがある」／etc.

［返答］こういう「精神論」的な叱咤激励を、無責任にしないで欲しい。

又、（何も知らないくせに）私の能力や人生を勝手に規定しないで欲しい。私がこの数十年間、どんな人生を送り、どれだけ苦しみ、どんなに苦労してきたか、あなたにはわかっているのか？

私は十二分過ぎるくらいに頑張ってきたつもりだし、自分の能力以上の事を成し遂げたとも思っている。そして今はもう、精も根も「気力」も使い果たした。

、、、今はただ、（永遠に）「休息」するのみである。

［ダメな意見例４］

「人生、色々なことがある。」

［返答］だから今、私はその「人生の色々な事」のうちの一つ（＝「死」）を経験しようとしているのです。あなたの方こそ（「死」を「忌み嫌うべきもの」と決めつけて）「食わず嫌い」してるのではないですか？

［ダメな意見例５］

「死ぬのはいつでもできる」

［返答］だったら今、死んでも別に構いませんよね？

（私の場合、「死」を引き延ばせば延ばすほど、「科学者（研究者）、江澤潔」としての信用を失うリスクが高まるのです！！）

［ダメな意見例６］

「人生、捨てたもんじゃない」

［返答］それは私も心得ているつもりです。そもそも、私は人生に絶望したり、悲観したりして死のうとしているのではないのです。私も、２０代の頃は色々な趣味や娯楽を楽しんだし、３０代の頃は（成り行き上）バイトや仕事や海外渡航を通じて様々な事を体験したし、４０代後半から５０代にかかては大きな事を成し遂げ、大きな達成感を味わいました。私はもう、思い残す事はありません。私は今、自らの人生に満足してこの世を去ろうとしているのです。

「井の中の蛙（かわず）」

江澤　潔　[発案： 2019 秋; 手書き ：2020/12/20 ； 電子文書化： 2021/03/20]

「井の中の蛙（かわず）大海を知らず」

ということわざは多くの方々が知っていよう。これは普通、

狭い世界に閉じこもってばかりいると、世間全般（あるいは世界中）で起きている事を知らない「世間知らず」で終わってしまう（だから、狭い世界を飛び出して、広く世間を知りなさい）、

というニュアンスで使われることが多いと思う。

しかしながら、実は、このことわざに続きがある事を知る人は少ない。続きは、

「されど、空の深さを知る」

である。

井戸の中にいる蛙は恐らく、日がな毎日、井戸の口から空を眺めていた事であろう。そしてきっと、季節や天気の違い等により、空の「表情」が千差万別に変化する事を知っているに違いない。このことわざは多分、そんな意味合いを持っているのであろう。

　　昔、中国の三国時代、「三国志演義」でも有名な蜀の将軍、趙雲子龍は、毎日々々、硬い地面に足型の穴があくまで槍の稽古を繰り返し、天下無双の槍使いになった（、、、という伝説があったとかなかったとか、、、）。

　　また、ある偉い日本人物理学者は、英語の出来がからっきしだったにも関わらず、その尋常ならざる数学の実力ゆえに、某名門国立大学（旧帝大の一つ）の大学院入学試験に「特例」として合格し、その後、ノーベル物理学賞を受賞するまでになった。

私も、中途半端に世界を渡り歩き、世間の一通りのことを表面だけ知っている「コスモポリタン」になるよりも、むしろ、一つの事を徹底的に追求した、「空の深さを知る」「井の中の蛙」になりたい。

「誉（ほまれ）ある死」

江澤　潔 [手書き：2020/12/21; 電子文書化：2021/03/20]

かつて、日本も含め世界のあちこちで「誉（ほまれ）ある死」という概念があった様に思われる。

例えば、祭りなどで、神に人の身を「生けにえ」として捧げる際、「生けにえ」となる人物は（例えば、村一番の勇者とか、村一番の美人などと）厳選され、誇りを持って神に召された事であろう。（やがて、それが後々、罪人や戦争の捕虜などを強制的に「生けにえ」とする様に変わっていったのかも知れない。）ある（迫害された）宗教の為の

「殉教」や、ある貴人の死に伴った「殉死」も、それが自発的ならば「誉ある死」と考えられるかも知れない。

日本でも、武士の時代（とりわけ江戸時代）に行われた「切腹」は「誉ある死」の一種であろう。「切腹」は、武士が己の誇りを守るために行われ、罪人等が処せられる「打ち首」等とは明確に区別された。

しかしながら、日本では、明治維新後に西洋文明が流入＆席巻するにつれ、「誉ある死」の風習は「野蛮なもの」として廃されることとなった。

[ちなみに、私の意見では、この様に、自分らの文明、文化と相容れないものや異なるものを片っ端から「野蛮」と決めつけて排除した西洋人達の方こそ「野蛮」だと思う。、、、当時の西洋人達には「多様性」を容認する心が欠けていたのである。（そして、それが数々の悲劇につながった。）

]

それにも関わらず、最近になっても自殺者の数は年々増え続けているらしい。

「誉ある死」があった時代、「死」は今よりも身近にあった。飢饉（ききん）や伝染病、そして戦さや争いがあるたびに、あちこちで死人が出た。それ故、人々は常に「死」を意識し、「今、生きている一瞬々々」を大事に生きていた事であろう。

「誉ある死」がなくなった現代では、食料、医療、衛生事情が向上し、また、治安も良くなった為、「死」が日常から次第に遠ざかっていった。その結果、「今、生きている一瞬々々」の大切さを人々が忘れてしまったのかも知れない。マスコミはオウムの様に「命の尊さ」を叫んではいるが、彼らの言葉には魂が込もっていない（あるいは内容が伴っていない）為に、人生の今や将来に不安を感じている若者達の心に、その言葉は届かない。

「誉ある死」があり、人々が一瞬々々を大事に生きてきた昔と、

「誉ある死」はなくなったが人々が一瞬々々をなおざりにする様になった現代とで、

どちらの方が人々はより幸せなのだろうか？

［ちなみに、私自身は、

３０歳以降、そのおかれた状況から必然的に、常に「死」を意識せざるを得ず、結果として、一瞬々々を大切に生きて来た。それが、実力以上の事を成し遂げた一因となったのかも知れない。

］

「小さなつづら」と「大きなつづら」

江澤　潔［手書き：2020/12/25; 電子文書化：2021/03/21］

「舌切り雀（すずめ）」という説話がある。

前半部を大きくはしょって後半部のハイライトシーンだけを取り出すと、

雀のお宿を訪ねた正直爺さんが帰る時、雀がお土産にと、小さなつづらと大きなつづらを示し、一つ選ばせた。お爺さんが小さなつづらを選んで持ち帰ると、中には金銀財宝が入っていた。それを見た意地悪婆さん（多分、爺さんの妻）が雀のお宿を訪ね、今度は大き

なつづらを選んで持ち帰ると（確か道中で開けてたハズ）中から毒虫、毒蛇や物の怪が出てきた、

という様な話だったと思う。

ここでの、

- 「小さなつづら」を正直や慎ましさの象徴、
- 「金銀財宝」を幸福や繁栄の象徴、
- 「大きなつづら」を不正直や強欲の象徴、
- 「毒虫、毒蛇、物の怪」を不幸や災厄の象徴、

と捉え直すと、この説話の教訓、つまり、

「あまり欲深くならずに、正直に、慎ましく生きよ」

と言う教えは、広く、様々なところに当てはまる。

似た様な説話も多く、例えば「花咲か爺さん」や「コブ取り爺さん」等の日本の説話や、海外でも、「金の斧と銀の斧」の童話等がある。このことから、

「あまり欲深くならずに、正直に、慎ましく生きよ」

と言う教えは、古来から伝わる世界共通の教訓であったことが伺える。

しかしながら、近年では、人類は、「人口増加」や「経済成長」と言う名の「大きなつづら」、即ち、欲深い選択肢、ばかり取ろうとして来たが為に、自らを絶滅の淵へ追いやろうとしている。

、、、そろそろ、「人口減少」「経済縮小」といった「小さなつづら」、即ち、古来から伝わる知恵にならった勇気ある選択、をしてみてはいかがだろうか？

「生きる事」の価値や意義

江澤　潔［手書き： 2020/12/26; 電子文書化：2021/03/21］

私の意見では、「生きる事」の「価値」を議論するのは、恐らくあまり意味がない。何故なら、そもそも「価値観」と言うものは主観的なものであり、違う立場の人は違う価値観を持っているからである。従って、真逆な価値観を持った者同士でこの話題を議論してもおそらく平行線に終わるだけであろう。

　　でも、これで終わりにしてしまうと、身も蓋もないので、もう少し論じよう。

　　それでは、「生きる事」の「意義」はどうだろうか？これも「価値」同様、立場によって変わる恐れはあるかもしれないが、少なくとも、人間は所詮はあまたある生物たちの一種にすぎない、という「絶対的事実」から、「最大公約数的」な「意義」は与えられるかも知れない。

　　どの（多細胞真核）生物も、「生きる事」はその親に産み落とされる事から始まる。これはあくまでも、その親の意志や都合によってなされるもので、産み落とされる者自身には何ら選択の余地もない。特に有性生殖の場合、ある個体が生まれるには、大抵、♂型

接合体（精子）と♀型接合体（卵子）のドッキングが必要である、それは数多くある可能性のうちのほんの少しだけが実現される、まさに「運頼み」の出来事である。

つまり、「運」か「不運」かはさておき、我々一人々々（あるいは一匹々々）は、「偶然に」産み落とされた、とも言える。

そしてその後、「運が良ければ」、個体は十分に成長して成体（大人）とまり、生殖能力を獲得し、更に「運が良ければ」、パートナーと巡り合って自らの子孫を残すことが出来る。そして、大抵の生物種では、子孫が残せたら、それで成体の役目は終わり、その個体は一生を終えるが、（人間が属するほ乳類や鳥類も含め）ごく一部の生物種では、子供がある程度成長するまでは、その親が面倒を見る。しかしながら（人間や一部のほ乳類等を除くと）ほとんどの場合、生殖能力がなくなれば、やがて死を迎える事となる。

即ち、生物学的、特に遺伝学的もしくは進化学的に見ると、一般には、

「生きる事」に意義が見いだせる期間は、自らが産み落とされてから子供を産み落とすまで、もしくは（一部の場合）子供が十分に育つまで、

という事になる。

しかしながら、人間を含む一部の生物では、違う個体同士が寄り集まって「社会」を形成する。こういった「社会型生物」になると、もう少し事情が複雑となり、「社会的役割」というものが発生する。

例えば、ある個体が、病気やケガ等が原因で生殖能力を失ったとしても、親の代わりに集団中の子供の面倒を見て、それをその親が「有用だ」と認めれば、その個体が生きる意義はあろう。更に、集団中の「長老」の役割はしばしば重要である。何故なら「長老」は、長年生きてきた様々な経験に基づく知恵を持ち、それがしばしば集団を（絶滅の）危機から救ったりするからである。

こういった、「知恵袋」や「子育ての手伝い」の役割はかなり広く「社会型生物」の間に認められるが、人間の場合、複雑でかなり組織化された社会を築いているので、更に様々な役割が存在し、極端な話、言い換えれば「（きちんとした仕事に就いて）働いている」限り、「生きている意義」はある、と言っても良いのかも知れない。

しかしながら、地球が有限である限り、資源には限りがあり、特に他の社会や他の生物種等との（特に「場所」も含んだ）資源を巡った競合がある事を考えると、その個体が社会にもたらす「益」と社会に課す「重荷」との兼ね合いにより、その個体の「生きる意義」が問われる事になる。ぶっちゃけて言えば、「（社会から給付される）食い扶持に見合うだけの働きをしていなければ（社会から）追い出される（→ 死）」という事になる。

これを、人間社会に適用すると、（子供を産み育てるという）「子育て世代」を終えた個人が、社会にもたらしうるメリットは：

- （それまでの自らの人生で獲得した）「知恵」の供給、
- （自分の身内や隣近所等の）子育ての手伝い、
- （まだ十分元気であれば）労働力の供給、

等があり、社会に課す「重荷」としては：

- （賃金や年金等も含む）生活費の受給、
- 医療費（特に、健康保険による社会の負担分）、
- （介護等を含む）サービスを受ける事、
- その他、市場、資源、（働く）機会等を若者たちから奪う事、

等が挙げられる。

この中で、特に「知恵」の供給に関しては、一般的な生活の知恵は最近はインターネットで容易に入手可能である為、価値ある「知恵」はその個人が持つ特殊な専門知識に

限られてしまい、それすら、インターネットで公開してしまえば、その個人の存在意義はなくなってしまう。従って、もし、「知恵」をもって自らの「存在意義」としたい場合、それを他人には秘密にしておくしかないが、その際は、もしその人が不慮の死を遂げた場合には、その人がそれまで苦労して獲得した知恵が（誰にも伝えられずに）「消滅」してしまう、というもったいない事になる。[私個人としては、「知恵」は独占せずに、完全に（オープンソースとして）公開してしまうのが望ましいと思っている。]

従って、人間社会の場合、（あくまでも遺伝学的あるいは進化学的な観点からは）

ある一個人の「生きる意義」がなくなるのは、上記で言う「（社会的）重荷」が不可逆的に「（社会的）メリット」を上回った時

であろうと私は考えている。[3]

以上、私の考える「生きる事」の「最大公約数的」な「意義」について述べたが、別に私は自分の考えを他人に押し付けたいとは思わないし、「生きる事」の価値や意義を他の人々がどう考えようと、私の関知した事ではない。しかしながら、同時に、私の考えを強制的に変えようとしても、それは無理であり、私の考えを変えたいならば、少なくとも上記と同等、あるいはそれ以上に理にかなった議論をして頂きたいと思う。

3　私は「重荷」や「メリット」を逐次的なものと考えるが、人によっては積算的なものと考える場合もあろう。ただし、積算的にすると、社会を健全に保つ力は当然弱まることは一考に値する。

「老後の不安」を抱える若者達

江澤　潔　[手書き： 2020/12/27; 電子文書化：2021/03/21]

ニュースか何かで見聞きした話だが、

最近、若者の多くが「老後の不安」を抱えていると言う。

また、こちらは昔からよく聞く話だが、

今でも、就職活動の際に、若者の間では（大企業に採用されたい等の）

「安定志向」が根強いという。

　　私は、これらの傾向や風潮は、憂慮すべきものだと感じている。何故なら、そこには、「これから先暫く（例えば５０年間以上）は日本、そして世界は安泰である」という「根拠なき楽観的な予想」が根底に透けて見えるからだ。この様な考えは恐らく彼（女）達の周囲の（親も含む）「平和ボケ」した大人達に吹き込まれたものであろうが、現在の日本、そして世界における情勢を鑑（かんが）みれば、その様な楽観論はただの「幻想」に過ぎない事がわかるであろう。

　　今、日本は少子高齢化および政治家達のポピュリズム（即ち、愚かな有権者達の「人気取り」に走る傾向）も手伝って、史上空前の財政赤字を抱え込み、又、その周囲では、中国、ロシア、南北朝鮮等の近隣諸国が、国力の弱った日本から領土をかすめ取ろうと、虎視眈々と狙っている。それに加え、戦後長い間、日本の「ガードマン」の役割を担ってきた米国も、最近は自国の財政赤字の問題もあり、日本や他の同盟諸国等から軍の多

くを引き上げようとしている。又、イラン、イスラエル、サウジアラビア、トルコといった中東情勢も不安定化し、日本への石油供給も危うい状況である。

又、地球規模で見れば、地球のキャパシティー（capacity, 受容力）を超えた人口増加や（経済等の）人間活動の拡大の為に、南極北極の氷は融け、シベリアの永久凍土も融け始め、（CO2 よりも強力な温室効果である）メタンガスの大量発生がいつ始まってもおかしくないし、アマゾン等では乱開発のため熱帯雨林がどんどん切り崩されている。そして、大気中の CO2 の濃度の上昇による地球温暖化のせいもあって、ある島国は「消滅」の危機に瀕し、米国西部やオーストラリア等では大規模な森林火災が発生し、ここ日本でも、台風等の自然災害は毎年の様に激甚化している。

そして更に日本では、これから数十年のうちに首都直下型地震や南海トラフ地震等の「超大規模地震」がほぼ確実に起こると予想されているのだ！！

この様な状況下で、日本が今後５０年間、今のまま安泰でいられる確率はほぼゼロに等しい。［大企業にしても同じことが言える。仮にその企業が倒産しないにせよ、倒産を防ぐ為に大規模なリストラが実施され、あなた方自身がその対象になる可能性はかなり高かろう。］

従って、若者達には考えを改めて欲しい：
「安定した生活」は、上から与えられるものではなく、自らの奮闘（もっと正確には自分達の「共闘」）によって勝ち取るものだ、
と云う風に。

特に、地球温暖化も含む地球環境破壊の問題を解決するには国際協調が欠かせない。しかも、これからの国際協調は、これまでとはベクトルが真逆のものにならねばならない。即ち、世界の国々で協力して、人口、そして（経済も含む）人間活動を縮小せねばならないのだ！！そして、そこにこそ、我々日本（人）が世界を牽引していくチャンス、というよりもむしろ、必要性が生じる。日本は今、世界に先駆けて「人口減少」を経験している。

この「人口減少」の下で、経済が縮小しつつも国民が幸せに暮らせる様な（政治や経済も含む）社会制度を確立できれば、米国、中国、インド、ロシア等の大国も含む世界中がそれを見習う余地が生じる。

しかしながら、最後には議論で相手を説き伏せる「説得力」を日本国民が身に付ける必要がある。もちろん、この基礎を成すのは語学力、特に英語力、であるが、実は、それだけでは足りない。

（最近はよく知らないが、）我々の世代くらいまでは、議論（ディベート、debate）の授業なるものは存在せず、我々にはそのノウハウや「実践経験」が（米国等の）外国に較べると著しく不足している。だから、外国人から「日本人は何を考えているのか分からない」と気味悪がられたり馬鹿にされるのだと私は思う。従って、少なくとも中学あたりからは主要科目に加えて「議論（ディベート、debate）」の授業を特別に（少なくとも）一コマは設けて毎週実施し、ノウハウを習ったり「実践経験」を積ませれば良い。（例えば、中学では日本語で実施し、高校からは英語で実施する様にしても良い。）

いずれにせよ、自然災害の激甚化や最近の新型コロナウィルスの世界的蔓延（まんえん）、そしてどんどん不安定化する国際情勢と、もはや悩んでいる暇すらない状況である。一刻も早く、この二つの柱：

- 経済が縮小しても国民が幸せに暮らせる社会制度
- 国際的な議論における「説得力」

を確立して、日本が世界を引っ張っていく必要があり、それを担うのは（頭が十分柔らかい）若者達しかいないのである！！

「老後の不安」なんて感じている暇はない！！

今、やらねば、明日は既に（日本、あるいは世界中が）滅びているかもしれないのだ！！

それら（前述の二つの柱の確立）が済んで、世界、そして日本が「安泰に」なってから始めて、「老後の不安」を感じたければ、いくらでも好きなだけ感じれば良い。でも、それまでは、「老後の不安」よりも、明日、あるいは今から数年後に自分達が生き延びていられるかどうか？を心配し、（「滅亡」を食い止めるべく）行動した方が、健全かつ良識的だ、、、と、少なくとも私は思う。

若者達よ、今こそ起ち上がれ！！

「同調圧力」の国

江澤　潔　[手書き：2020/12/28 & 2021/01/12; 電子文書化：2021/03/21]

日本は「同調圧力の国」だと、私はつくづく思う。人々はあっちに連れ立って行っては何かをし、こっちでも仲間で一緒に何かをする。

その良い例が、ゴールデンウィーク、お盆休み、そして年末年始等の大型（？）連休である。人々が一斉にこの時期に休暇を取り、帰省やバカンスに出かけるので、高速道路は大渋滞に陥り、新幹線等の列車も超満員のぎゅうぎゅう詰めとなる。普段でもラッシュアワーには列車はぎゅうぎゅう詰めなのに、これで充分に休息が取れているのか？と心配になるが、本人達は休み明けに自分が捕まった渋滞の長さ等を自慢しあったりしているので、それなりに満足している様である。

その他にも、忘年会、新年会等の会社での飲み会や、最近ではハロウィンパーティーやクリスマス会等も行われている模様である。[昔に比べると、上司 ⇔ 部下の「縦の関係」は薄くなったが、代わりに同年代同士の「横のつながり」が濃くなった、という事なのだろうか？] そして、会社では、正規の勤務時間が終わっても、社員達は残業やサービス残業で残ったりして、「連帯感」を感じつつ仕事を進めている様である。

日本の社会において、どの様にして、この「同調圧力」が生まれ、根ざしたのか？がよく分からない。でも、少なくとも、それは、太平洋戦争中にはあった筈である。その頃には、国民皆んなが「お国の為に」働いたり活動する事が良しとされ、それに逆らう者は「非国民」として避難を浴びた。

「同調圧力」には、人々が同じ目標に向けて動くのを促進する、という「正の側面」がある一方、行き過ぎると、その「負の側面」が首をもたげてくる。「負の側面」の例としては、「少数派」の「排除」や「いじめ」（あるいは「迫害」）等がある。要するに、周囲の人々と同じ行動をしない人や同じ考えを持たない（あるいは「示さない」と言った方が正確か）人を「仲間はずれ」にしたり、その人に「嫌がらせ」や「罰」を与えたりする事である。

私が考えるに、日本の人々が「同調圧力の民」であるのは、一つには、周囲と同じことをしないと不安に陥る、という、自らの思想・行動を他者、特に多数派に依存する精

神構造が人々の「内側」にあり、そして「外側」からは、上記で述べた「少数派」の「排除」「いじめ」「迫害」の可能性という「無言のプレッシャー」があって、結局、周囲に従わざるを得なくなる、といった事情があるのであろう。

私が思うに、私が今、世を去ろうとしているのを周囲が必死に止めようとしているのも、ただ、「自殺はいけない」という一般観念に従ってだけでなくて、ある種の「同調圧力」が関係しているのではないか、と思ったりする。つまり、多くの人々が「長生きしたい」と無条件に（あまり深く考える事もなく）思って生活している所に、いきなり私の様に、まだ（？）５０歳ちょっと過ぎで「もう人生に悔いはない、あとは、この世を去るのみ！」という考えの人間が現れると、「ひょっとして、自分（達）自身の考えは間違っているのでは？」と不安にかられるので、必死に私を止めて、私を自分達に「同調」させようとしているのかも知れない。

同様に、私がかつて（終身研究職の）公募に応募するのを止めて、生まれ故郷で自分の研究を完成させることを明らかにした時に、元上司や元同僚の態度が急に冷たくなったのも、「公募に勝ち取って正規の研究者（兼教育者）になる」という「標準的な（ただし非常に狭き）キャリアパス」を目指す事に対する一種の疑念や不安を払拭したくてだったのかも知れない。

とは言うものの、「同調圧力」は、確かに「目標」がしっかり定まっていた明治維新、（戦後の）高度経済成長期、そしてバブル経済期等には、「目標」に向けて「国民の力を結集する」のに有効な役割を果たしたかも知れないが、今の様に「確固たる社会／経済／政治のモデル」が存在しない時代においては、それを打破するのに不可欠な「多様性」を抑制（あるいは排除）するという、負の作用の方がどうしても大きくなってしまう。

そろそろ日本人も、「同調圧力」を捨てて「空気を読む」手間を省いて、言うべき事ははっきりと言い、やるべき事は（たとえ周囲が支持しなくとも）断行する、様になるべきではないのか？そうしないと、どんどん国際社会から取り残され、「落ちこぼれて」しまうばかりであろう。

特に、これから日本にも外国人が大量に流入してくるのは、もはや不可避であるので、一刻も早く「空気」に依存するコミュニティー（community, 共同体）のあり方から脱却して、「議論」に基づく明快な意思決定をするコミュニティーを構築する必要がある。

独裁政治[4]について

江澤　潔　[手書き：2020/12/30; 電子文書化：2021/03/21]

日本人、あるいは西側諸国の人々、の多くは、「独裁政治」と聞くと、ネガティブなイメージを想起する事と思う。しかし、私が思うに、それは思い浮かべられる代表例 [例えば、第二次世界大戦（前～中）のヒトラー、戦後北朝鮮の金日成とその子孫、かつてのイラクのフセイン、かつてのリビアのカダフィー、等々]が与えるイメージと、西側「支配者」

4 「独裁政治」と「専制政治」の区別がよく分からないので、ここでは、二つをまとめて「独裁政治」としておく。

達のプロパガンダによるものだと思う。[そして、実際には、上で述べた代表例ですら、地域や時代によっては独裁者達は人民に「英雄」としてあがめられていたハズである。]

それでは、「民主政治」が本当に理想か？と言うと、そこには疑問を挟まざるを得ない。例えば、普通選挙制の下では全ての人民に等しく一人一票が委（ゆだ）ねられるが、そこには高等教育を受けた「インテリ」から義務教育すらまともに受けてない者まで含まれる。そこで例えば Brexit （イギリスの EU 離脱）の時の様に、国民投票の結果、周囲から見ても「あまり賢くない選択肢」が選ばれてしまったりする事すらある。[４年前の米国大統領選挙も、人によっては「悪い例」と捉えられるかも知れない。]

かと言って、例えば「教育レベル」で投票の重みに差をつけようとすると、今度はどんな教育を受けたらより票を確保できるかで「差別化」が起こり、場合によっては国民の「洗脳」にもつながり兼ねない。もう一つの（完全な）「民主政治」の問題点は、意思決定が遅くなり、対策が後手々々に回りやすい、と言う事であろう。結局のところ、皆んながそれぞれ好き勝手言っていたら、まとまる話も容易にはまとまらない。これは、意思決定に（例えば有効投票数の 2/3 とか）「超過半数」を要する時に生じやすい問題だが、かと言って、「過半数（= ½ 以上）で OK」とすると、上述の Brexit やトランプ大統領の様な事が起こり得る。

私が思うに、「独裁政治」の良し悪しは、個々のケースごとに判断すべきだと思う。例えば、ヨーロッパ、特にフランス、では今だに人気があると思われる皇帝ナポレオンやローマ帝国の土台を作ったカエサル（シーザー）とその子オクタビアヌス（初代ローマ皇帝）等は、賛否両論はあるかも知れないが、その後のヨーロッパを形作る役割を果たしたし、今の中国における一党独裁体制も、西側諸国からは「人民の自由がない」と批判されているものの、様々な問題に対する対応の迅速さでは、西側諸国を圧倒しているのは明白である。

又、日本でも、かつて「名君」と呼ばれた人々、例えば江戸幕府８代将軍の徳川吉宗や米沢（？）藩の上杉鷹山、そして幕末の薩摩藩や長州藩の藩主（あるいはその名代）、

による政治を考えると、確かに身分の低い人材を登用したり、人民の声に耳を傾けたりはしていたかも知れないが、国家（あるいは藩）の命運は最終的にはその主に委ねられ、又、（当然ながら）その主は公選された訳でもないので、ある意味「独裁政治」と呼べるかも知れない。

［「『名君』の政治」を「独裁政治」と一緒にするな！と歴史愛好家たちは憤慨するかも知れないが、私はあくまでも客観的な基準に基づいて論理的に分類しただけであるし、そもそも「独裁政治」は悪い政治だ、とは一言も言っていない（下記参照）。］

　　これから判断するに、「独裁政治」の良い点は、（特に、旧体制の崩壊後や戦時中や戦後等における混乱期において）迅速に判断や対応が行える点にある。そして、最も悪い点は、「独裁者」の人格や能力に著しく依存する点であろう。例えば、「独裁者」が「名君」の様に、国家や人民の事を第一に考える「滅私奉公型」であり、かつ賢い（本人でなくとも、最重役の側近が賢くても良い）場合には、国家の一大事に迅速、公正で賢明な政策が取られ、国家は崩壊を免れ、さらには発展を遂げるかも知れない。一方、「独裁者」が自分の私利私欲ばかりに興味があったり、仮に「滅私奉公型」でも愚鈍な場合（即ち、「暗君」の場合）、いくら対応が迅速でも、ある偏った人々にのみ恩恵があったり、国家を滅ぼす様な愚かな選択肢を取ってしまう。

　　上記の様な「'独裁政治」の悪い点は、特に、一人の「独裁者」による政治が長期化したり、「独裁者」が世襲によって決めれらたりする場合に顕著となる。前者の場合、財界との「癒着」が起きやすくなるし、後者の場合、いずれ「暗君」が「独裁者」になるリスクが高まる。これらを踏まえると、

常に独裁者が「滅私奉公型」で賢い「カリスマ」的人物が

「独裁者」に選ばれる様な政治システム

を作れば、ひょっとしたら、下手な「民主政治」よりもずっとマシな政治が長期間に渡って行われるかも知れない。

「大統領制」等は、そこら辺を狙って考案＆創設されたのかも知れない。しかしながら、例えば米国では、大統領を擁した「与党」が議会の過半数を握れない「ねじれ」が近年ひんぱんに起きており、なかなか（大統領の）思う様に政策が進まないでいる。一方、ロシアでは、強大なプーチンによる政治で数々の「危機」を脱して来たが、政権が２０～３０年と長期化して来たせいか、選挙での不正等でしばしば（西側から）非難されている（し、財界との「癒着」も疑わしい）。

　この様に、なかなか一筋縄では行かない様であるが、これら「先輩諸国」の良い点と悪い点を（あくまでも）客観的に考慮して、もっと良い政治制度を設計＆実施することは可能であろう。

　今は、日本も、そして世界も、先の見えない「混迷期」に入っているのは火を見るよりも明らかである。日本でも、そろそろ、１０～１５年の「時限的」でも構わないので、できれば公選された「滅私奉公型」で賢明な「カリスマ」的政治家による「独裁政治」を断行しても良いのかも知れない。

太平洋戦争の「爪跡」

江澤　潔　［手書き：2021/01/02-05; 2 電子文書化：021/03/24］

太平洋戦争（あるいは大東亜戦争）の終戦（1945/08/15）からはや７５年、そして開戦（1941/12/08）からだと約８０年経った今でも、太平洋戦争の「爪跡」は全国に残っている。有名な「ひめゆりの塔」（沖縄）、「平和の像」（長崎）、「原爆ドーム」（広島）等の物理的な「史跡」ももちろんの事であるが、私がここで論じたいのは、（我々「戦争を知らない世代」も含め）人々の心の中に残っている「爪跡」の事である。ここでは特にそのうちの二つ、「戦争嫌悪主義」と（盲目的な）「命の尊さ」信仰を取り上げる。

太平洋戦争の前とさ中では、日本全国は「軍国主義」一色となり、敵国（主に米国と中国）を倒す為に、日用品やお寺の鐘までも軍に供出された。そして、１９４５年８月15 日に敗戦が決定すると、米国中心の連合国軍総司令部（GHQ）の占領下におかれ、日本国憲法の制定＆実施など、「平和主義国、日本」に生まれ変わる様に統治された。そして、恐らくは米国をはじめとする連合国の「日本を再び軍国主義にしてはならない」という強い意志にに加え、日本国民の「あんな戦争はもうコリゴリだ」という戦争を嫌悪する強い気持ちとが相乗効果をもたらし、大半の日本人はいつの間にか「戦争なんか絶対いやだ」という「戦争嫌悪主義」に陥っていったものと思われる。

私は「平和主義」と「戦争嫌悪主義」とは、一見非常に似てるが本質的には異なるものではないかと思う。

日本国憲法で規定している「平和主義」は、色々な解釈があるのでここでは真っ向からは論じないが、一般に言えば、「平和主義」は、国際紛争が起きそうな時、あるいは生じた時に、できる限り外交的手段を駆使して解決し、決して、軍隊等の武装部隊（自衛隊も含む）をその紛争の場や相手国に派遣して武力行使や武力による威嚇をすることで、

その紛争を「解決」しようとしない事を意味する、と私は思う。それは、相手が我が国の領土に武力で攻め込んで来た場合に、それを武力でもって撤退させる事までは禁じてはいない。（ただし、日本国憲法の９条２項で、「武力の放棄」をうたっている為、「自衛隊は憲法違反である」という解釈が生じる。）

一方、ここで論じている「戦争嫌悪主義」は、多分、戦後の日本国民の「戦争はもうコリゴリだ」という感情の延長線上にあり、「戦争なんて絶対しない（だから、軍隊も持たない）」という、ある種ヒステリックな感情であり、「仮に、他国が日本に攻めて来たら」等の「現実的な仮定に基づいた」議論および備えすら放棄してしまう。それはいわば、「軍国主義」の反動により、「針」が「丁度良いところ」を通り越して反対側にまで振れた様なものである。「だって、今、日本は平和だからいいじゃん」等と反論もあるだろうが、最近の日本をとりまく国際情勢は緊迫感を増しており、又、米国も次第に日本のガードを緩めようとしているので、「朝、起きてみたら中国／ロシア／（北）朝鮮に占領されてた」なんて事も起こらないとも限らない。

「平和」を訴えたり「戦争反対」を叫ぶのは大変結構な事であるのだが、「どこか」が攻めて来た時の「備え」（もちろん軍備も含む）くらいはしっかりとしておいた方がよかろう。［ある土地に、家が二軒並んでいて、一方には最新鋭の防犯装置および警備がついており、もう一方は何も付いていなかったとして、そこに泥棒（窃盗でも強盗でも良い）が通りかかったら、どちらに忍び込むかは、一目瞭然であろう。］ 従って、今のほとんどヒステリック、あるいはアレルギー的な「戦争嫌悪主義」をもっと理性的、現実的かつ合理的な「平和主義」に変える事は必須と思われる。もちろん、外交的手段による国際問題解決は最優先させるべきで、それに関しては、日本が戦後から今まで積み上げて来た平和的紛争解決の実績を損なわず、むしろ更に上積みできる様にしなければいけない。しかしながら、「いざ」という時に「侵略」に対し十分な抑止力および防衛力を果たすだけに必要最小限の軍備の保有くらいは、憲法にも明記して良いのではなかろうか？[5]

5　最近話題になった「集団的自衛権」は、複雑な問題なのでここでは論じない。

いずれにせよ、日本（人）が極端な「戦争嫌悪主義」にも関わらずこの７５年間やって来れたのは、ひとえに米国の「核の傘」およびアジア太平洋地域に配備された米国軍の存在のおかげである。それは例えるならば、「屈強なガードマンを後ろに従えた丸腰の人間」の様なもの、又、古典的には「虎の威を借る狐」のようなものである。言い換えれば、「日本は戦争は絶対しない、その役目は（同盟国の）米国に任せた！！」と言ってるも同然である。つまり、現在の日本国憲法下（および日米安保条約下）で運営している日本国は「偽善者」なのだ！！

、、、一刻も早く、この事実にすべての国民が気付き、国民全体を巻き込んだ理性的、現実的かつ合理的な議論の下、日本が「真の平和主義国家」に生まれ変わる事を私は期待する。

次に、（盲目的な）「命の尊さ」信仰であるが、この様な考えは武士の時代には存在しなかったハズなので、恐らくは明治維新以降に生じたハズである。又、戦時中にこの様な考えを唱えれば「非国民」呼ばわりされる為、広まったのは太平洋戦争以降であろう。戦前には、与謝野晶子や内村鑑三らが、それぞれの立場から戦争を批判したり戦争反対を唱えたりしたと記憶している（間違ってたらゴメンナサイ）が、一般人の「命の尊さ」まで訴えていたかどうかは私は知らない。「命の尊さ」自体が謳われる様になったのは、もしかしたら1961年の新安保闘争での学生の死や、１９７？年の「浅間山荘事件」等、連合赤軍による大量死傷事件の反動で広がりを見せ、１９９？年のおオウム真理教による一連の死傷事件の反動で一気に広まったのかも知れない。が、私が思うに、恐らくその様な思想は太平洋戦争により日本でも軍民問わず大量の死者が出た事、および「神風」等の特攻により大勢の若者たちが戦死した事の反動として生じたのではなかろうか。[一方、欧米等ではもっと早く、例えば、第一次世界大戦での毒ガス等の大量殺人破壊兵器使用の反動で生じている可能性がある。]

「命が尊い」と訴える事自体には、私は特に異論をはさむつもりはない。人間も所詮は生物の一種であり、生物の各個体の最も基本的（即ち原始的）な駆動力は、「（ある期間までは）死を避けて生き残る（そして子孫を残す）」事であるので、その駆動力が「命が尊い」という概念につながったと考えれば、それはある意味当然の事である。しかしながら、最新の生命科学（特に進化学）的知見を基に論理的かつ倫理的に考えた際に、今日の人々が通常「命が尊い」と訴えている際にそれが意味するところに関しては、多少問題があると私は考える。それ故に（盲目的）「命の尊さ」信仰といささか揶揄（やゆ）的な表現を用いた。私がこの問題に関し、異議を挟みたいのは以下の三点である：

A）「命が尊い、だから○○はいけない」とした場合の○○に入るのは、「戦争」「殺人」「自殺」その他、様々な人的事故・災害を引き起こし易い行為、だけでいいのか？；

B）「命の尊さ」と言った時の「命」の含む生物学的範囲の狭さ；そして

C）（これが「盲目的」と呼ぶ一番の所以（ゆえん）だが）「命の尊さ」をもって、「医療の使命」を語る時に「医療」がどこまでやるべきか？あるいは、やっていいのか？（つまりは医療倫理と関連した問題）。

以下、それぞれに関して論ずる。

A）まあ、戦争、殺人や（例えば）危険運転等を入れるのは（本当はここでも「やむを得ぬ場合、どうするか？」等の議論があり得るものの）良しとして、本当にそれだけで良いのか？

例えば、ある商店街のすぐ隣に大型チェーンの百貨店やスーパーマーケット等が進出し、そのおかげでその街（あるいは市）全体としては潤った（GDP の街（市）版がアップした）が、そのせいで商店街の多くの店が潰れ、自殺やのたれ死にが多発した、としよう。［今はどうだかしらないが、かつてはよくある話だった。］　この時、「尊い命」が数多く奪われた訳だが、資本主義の「自由競争」の下ではそれは許されている。つまりは、GDP の向上をそれら「尊い命」の犠牲の下で実現するのは許されている。、、、、こ

れっておかしくないのか？私は、「命は尊い」と本気で訴えたいのならば、人々の生活のかかったこれらの競争（市場をめぐる企業競争やプロスポーツ、そして（場合によっては）オリンピックも含まれる）を禁止する、あるいは人々の生活がかからない様に改める必要がある、と信ずる。もっと端的に言えば、（原理的に「自由競争」に基づく）資本主義をやめよう、と訴えねばならぬハズである。そこまでやらないで、ただ、「命は尊い」なんて叫んでも、それは中途半端、あるいは「偽善」に過ぎないのだ！！

B）人々が「命は尊い」と訴える時、それは大抵「人の命」と暗黙的に決まっている。しかし、本当にそれで良いのだろうか？最新の生物学（進化学）的知見では、約35~40億年前に生まれた「共通祖先」から枝分かれして、今日のすべての生物：ヒト、ネズミ、イヌ、ネコ、ゾウ、カンガルー、カモノハシ、トカゲ、カエル、魚、ウニ、昆虫、クラゲ、海綿、キノコ、カビ、植物、原生生物、細菌、等々は生まれてきたことが分かっている。なのに人間達は、毎日々々億あるいは兆単位のこれらの命を、「料理」「殺菌」「駆除」等と称して奪っているのだ！！[6]

、、、何故、これら我々の「（遠い）親類達」の命は奪って良いのに、我々人間の命は奪ってはいけないのだ？

ちなみに、「旧約聖書」では、ある程度の答えは与えられていた：「神は、他のあらゆる動物達の「統治者」として、人間を創造した」と。しかしながら、（既に述べた様に）最新の進化学的知見をもって「旧約聖書」のこの世界観は間違っていることが証明された！、、、さあ、どうする？

もしも、「（遺伝的）優劣」をもって区別するとしたら、人間のどんな（遺伝的）形質あるいは「能力」をもって、その「資格」があるとするのか？［（道具を使わない）単なる遺伝的形質だけなら、そこらにいる細菌の方が人間よりもずっと優れているケースが山程ある。］　それに、仮に、「（遺伝的）優劣」による区別を一旦認めてしまうと、

6　「私は直接手を下していない」と主張する人もいるかも知れないが、そんな人々でも、「誰かの手によって」殺されたそれらの生物を食卓に運んで食べているハズなので（注：植物もキノコも生物である事を忘れるな！）そういう意味では「共犯」である。

人間の中の民族間の「優劣」による区別も認めることに繋がるし、更には、個人間の「優劣」による区別も認められ、かつての「王権神授説」も復活しかねないが、、、さあ、どうする？

かと言って、我々はそれら他の生物達の命を奪わずには、自らの命を維持することができない。この問題を深く考えれば考える程、「命の尊さ」とは一体何なのか？と疑問を持たずには居られない。

C）「命の尊さ」と「医療の使命」。人間の生来持つ基本的本能から「命は尊い」という気持ちが自然に生じ得る事は既に述べたが、そこから更に派生した「失われなくても済むハズだった命を救う」手段の一つとして、「医療」は生じたのかも知れない。そうすると、「医療の使命は人の命を救う事」というスローガンが生まれるのも理解できない事はない。しかしながら、それはあくまでもスローガンとして掲げるだけなら良いが、それを文字通り実践しようとしたり、それを「水戸黄門」の印籠の様に振りかざしたりしだすと少し（かなり）問題がある、様に思う。

例えば、大ケガや重病により「寝たきり」になったり、「植物人間状態」になったりして、もはや回復の見込みのない人々が「もう生きて居たくない、死にたい」と思っていても、「医療の使命は命を救う事」と言って生命維持装置をつけてただ延命だけするのはどうなのか？また、そこまで行かなくとも、重篤な障害や病気の為に、もう、以前の様に健常な生活に戻れない人を、本人の希望もないのに様々な装具や器具、さらには薬剤まで投入して無理やり生かし続けるのはどうなのだろうか？［私が思うに、障害や病気が原因の「つらさ」に対する耐性は、個人によってまちまちだと思う。非常に耐性の強い人がある障害を克服して頑張っているからと言って、「あの人を手本にしなさい」と言って、同じ障害を持つ、もっと耐性の弱い人々に、叱咤（しった）激励するのはいかがなものだろうか？、、、人は皆それぞれ違うのだ！！］

更に言うなら、最新の医療には「生命（いのち）をもてあそんでいる」様に感じる物もある。具体的には、臓器移植、（特に幹細胞を用いた）再生医療、ゲノム編集を用い

た医療、体外受精、それから（サイバー機能付きの）人工臓器、等々である。、、、「命を救う」為だったら、（他の）生命（いのち）をもてあそんでも良いのであろうか？

私は「自然主義者」、つまり、人間は自然に生き、自然に死ぬのが一番と思う人、なので、この様な「生命をもてあそぶ」類の医療には違和感を超えて危惧すら感じる。一体、彼ら医療関係者達は、何を目指しているのだろうか？

それに加え、人類は今や地球上に溢（あふ）れ返り、その活動は地球の受容力を超え、「母なる地球」は悲鳴をあげている。[その「悲鳴」の一環が、昨今の災害激甚化や新型コロナの世界的蔓延であると私は思う。] また、日本国内でも「高齢化社会」の問題があちこちで噴き出し、国家財政の慢性的な赤字の一因となっている。

、、、この状況で、「医療の使命は人の命を救う事」を字義通り取って、老人達や他の回復の見込みのない重篤患者たちに手厚い医療を施し続けたら、やがては人類が滅亡する（あるいはそこまで行かなくとも大多数が死滅する）という「逆説的な結果」が待っているだろう、、、と私は思うのだが、、、。

[もちろん、最も大きな原因である、人間活動の拡大、を食い止め逆転させるのが現在の人類の一番重要な課題ではある。]

この様に、盲目的に「命の尊さ」を「信仰」すると、医療の行き過ぎ等、様々な問題、矛盾が生じてしまう。これを避ける良い手段は恐らく、人間と自然のあるべき関係を踏まえた上で、「命の尊さ」を条件付き等、柔軟に捉える事であろう。

人間は所詮、地球上の数多（あまた）ある生物のうちの一種に過ぎないのだから、その地球上の自然の文脈で考える事が大事だと私は思う。例えば、ヒトを「食物連鎖」の文脈で捉え直すと、仮にヒトを「食物連鎖」ピラミッドの頂点としたら、そのピラミッドがどんな形であれ、その底辺を支えているのは「母なる地球」であるのだから、「母なる地球」の受容力をヒトの活動が超えてはならないのは明白である。それに加えて、自然な寿命が来たら、人生を終えて「土に還り」、食物連鎖の糧となることが重要である。従って、老人達を「薬漬け」にして無理やり長生きさせる事さえ、「母なる地球」の理（こと

わり）に反する、と私は考える。また、手術をして「身体の悪い部分」を取り除くのも、私はどうかと思う；何故なら、その部分が「悪く」なったのは、あくまでも自然になったのであり、「悪い」と決めつけたのは、あくまでも人間だからである；何故、自然に生じた（あるいは変わった）部分を取り除いて良いのだ？

[更に言うならば、今の様にヒトの活動が「母なる地球」の受容力を上回った状況では、「希望退職」ならぬ「（人生の）希望引退」もあってしかるべきだと私は思う。]

今まで論じて来た様に、太平洋戦争中の「軍国主義」の反動として、日本人の心の中に「戦争嫌悪主義」と（盲目的）「命の尊さ」信仰が根付き、広まったが、私は、これらは明らかに行き過ぎている事を論じてみた。これら、日本人の心の中に残った「太平洋戦争の爪跡」を治癒する為には、日本人の間どうしでの本音をぶつけあった、それでいて、冷静かつ客観的かつ合理的かつ論理的かつ現実的な議論が国中に広がる必要があると思う。[ただし、感情論に走るのと、科学的に反証された思想や概念を持ち込むのはやめにしよう。]

これも結局、「人類存続」の為

江澤　潔［手書き：2021/01/05; 電子文書化：2021/03/25］

私が自らを「『母なる地球』の使者」と呼ぶ事からも明らかな様に、私は「自然主義者」であり、「環境保護主義者」でもある。そして、私はこれまで地球の自然環境や生態系を守る為に、人類の人口を減らし、活動を縮小させるべきだ、と訴え、その為の様々な方策を論じて来た。これらの考えや方策が「厳しすぎる」と非難する人々も多いかもしれないが、よく考えてみれば明らかな様に、これらの提言は、結局のところ、「人類（あるいは今の文明）存続」の為である。これを以下に論じよう。

先ず、カギとなるのは地球上の生態系の「打たれ強さ」である。地球はこれまでに数回、生物の「大量絶滅」を経験して来た。私が知ってるだけでも：

i. 藍藻（ランそう）の大繁殖による嫌気性生物（細菌）達の「大絶滅」；

ii. 地球の「雪だるま」化による「大絶滅」；

iii. マントル層での「スーパープルーム（super-plume）」による「大絶滅」；そして

iv. 巨大隕石に激突による「大絶滅」。

しかしながら、地球生態系はこれらの「大絶滅」を克服し、「復活」した、、、ただし、「大絶滅」以前とは全く異なった姿形で、、、。例えば、i では、嫌気性生物の「王国」が好気性生物達により置き換わり、iv では恐竜の「王国」がほ乳類や鳥類の「王国」に置き換わった。

従って、仮に今の「人類の人口＆活動の異常な増加／拡大（＆温室効果等）」を新たなる「大絶滅」の原因だとすると、生態系の大部分は破壊されて失われるだろうが、そのあおりを喰うのは人類を含め、それら生態系に大いに依存して来た生物種のみであり、人類が「滅んだ」後は、恐らく「生き残った」生物種やその変異種により「新たな生態

系」が構成され、地球上に拡がるであろう。［ただし、「全面核戦争」でも起きて、地球全体が噴き飛んだりしたら、話は別である。］

いずれにせよ、この「大絶滅」は人類にも影響を及ぼし、その大半は死に絶えるであろう。生き残った人類も、「新たな生態系」が十分成長するまで持ちこたえられるか？また、「新たな生態系」を利用できるか？は全く未知数である。仮に持ちこたえられたとしても、それ以前の人類の文明や文化はほとんど失われる事だろう。

まとめると、現在の人類の人口増加＆活動拡大の結果、生物達の「大絶滅」が起きたとすると、その結果起こる事は：(1) 新たなる生態系の構成＆成長、と、(2) 人類およびその文明の大半の死滅（＆消失）、［そしてあるいは (3) 生き残った人類たちによる新たな文明の構築］、である。

いづれにせよ、

人類の大半は死滅するのだから、あなたやその子孫や親類が全滅する可能性は高い。[7]

その一方、「生態系」は違う形で「復活」する；恐らく、数十億年後、太陽が膨張して地球全体が「灼熱地獄」と化すまでは、この様な、生物の「大絶滅」→新しい生態系の構成＆成長が、数千万年〜数億年の時間スケールで「繰り返す」ことだろう。

従って、今の人口増加＆人類活動拡大およびそれによる今の生態系の破壊を食い止める為に私が提言しているアイディアは、結局のところ「人類（あるいは現在のその文明）の存続」の為に他ならないのである！！

［私は、今のままなら、現在の人類文明はあと百年保（も）たないと思う。もし、私の考えた方策あるいはそれよりも優れた策で、人口増加＆活動拡大を食い止め、逆転できたら、あと千年くらいは保つかもしれない。しかし、あと一万年保ったら奇跡的だろう。また、「文明の更新」も含め、現在の人類が保つのは、一番長くてせいぜい十万年のオーダーであろう。］

7　生き残るのは、まず間違いなく、十分な「防衛手段」を備えられる様な、非常に裕福な人々だけである。

合気道と居合道

江澤　潔　[手書き：2021/01/09; 電子文書化：2021/03/25]

私は一応、合気道と居合道の有段者である（共に二段）。

　　合気道と居合道は関係が深く、よく、

「剣を持てば居合道、剣を持たねば合気道」

等とも表現される。しかしながら、どちらにもそれぞれ流派があるらしく、一方のそれぞれの流派に、それに対応したもう一方の流派が存在するかどうかは、私は知らない。

　　私が合気道をやっていたのは、大阪大学在籍時の１９８７～１９９６年の９年間に加え、その後の学振研究員の２年間で、併せて１１年間くらいである（１９８７～１９９８年）。私が居合道をやっていたのは、学振研究員の最後の一年に加え、その後、名古屋大学大学院に通っていた３年間で、併せて４年間である（１９９８～２００２年）。そして、その後、遺伝研（三島）に移ってからは、あまりに勉強＆研究＆業務が忙し過ぎたた

め、どちらもパッタリとやらなくなってしまった。[この事に関しては、合気道および居合道の関係者の皆様方に大変申し訳なかったと思っている。]

私が合気道に興味を持ったのは、かなりかなりミーハーな理由で、確か「あばれはっちゃく」の主人公が合気道をしていた事、又、「夕陽ケ丘の総理大臣」で桜子先生（演じたのは由美かおるさん♡）が合気道をやっていた事（由美さん自身、確か合気道三段だったと聞いたこともある）、そして、多分最も大きな理由は、「ヤヌスの鏡」の主人公（杉浦幸演）および彼女が憧れていた男性教師（山下真治演）が合気道をやっていたということである。

そんな訳で、大阪大学に入学すると、いくつかの体育会系クラブの見学に行ったが、練習時間が夕方５時からで、週３回のみで、学業にあまり支障がなさそうだ、という理由で仮入部し、そこで達人並みの腕を持ったOBの方々や、私の好みをそのまま現実化した様な女性（一年先輩）に遭遇し、入部する決心をした。そして、２年になってからは阪大合気道部の「ホームグラウンド」である池田道場に週一回（日曜）通い、初段を取得した２年の冬からは、昭道館という、合気道大阪支部（？）の道場にも通い出し（大体週２回、早朝）、更には４年以降は千島部育会という、「強者」ばかりが練習に来られる道場にも参加する様になり（毎週日曜日）、私の合気道は徐々に上達して行った。

そして（確か）１９９３年春あたりに、合気道二段の昇段試験を受けたが、これが非常にきつかった！！　合気道二段の試験では、

口頭試問 → 掛かり稽古（受験者に大勢が（大抵一列になって）かかっていき、それを受験者が次々と投げる）→ 短刀どりのさばき＆技 → 二人取り（二人かかって来た時のさばき＆技）

と進むのだが、掛かり稽古でオーバーペース気味にのべ百何人かを投げてエネルギーを使い果たし、二人取りの時にはもう腰が重くてまったく動かなかったのを覚えている。その後、当時の大阪支部（？）のトップである小林師範の評価を伺いに控え室へ伺ったが、「君は男前だね」と言われただけで技の印象とかは話してもらえなかった。、、、きっと、

あまり印象に残ってなかったのであろう、、、(ＴＴ)。とは言うものの、どうにか合格し、昇段させて頂いた。

合気道をやって、実（？）生活で最も役立ったのは、恐らく「受け身」であろう。私は阪大大学院時代から学振研究員時代にかけての約７年間（１９９２～１９９８年）、スキーにもはまっていたが、スキーでウェーデルン（ショートパラレルターン）の練習、とりわけウェーデルンでコブ斜面を降りる練習、の際は、スッころびまくり、その時でも「受け身」が取れたお陰で大きなケガをすることもなく、上達していった。もう一つ、役立ったのが「足さばき」である。１６代OBのＫさんに、「半歩下がって（反対の足で）一歩進む」という足さばきを教わり、よく練習したが、そのお陰もあってか、延長コード等に足を引っ掛けて転びそうになっても、とっさにその足を後ろに引いて助かった事はよくあった。その他の技や体さばき等は、あまり実生活で使った事はなかった。

次に、居合道だが、こちらに関しては、時代劇等での役者の剣さばきの見事さに気を引かれたのも動機の一つかもしれないが、直接のきっかけは（冒頭でも述べた）「剣を持てば居合道、剣を持たねば合気道」という言葉を昭道館に通っていた時に合気道の指導員の一人から聞いた事である。そして、京都の淺田先生（片山伯耆流）のところに押しかけ、無理やり入門させて頂いた（のだが、その後、全く出来なくなる事は、当時は予想だにしなかった）。それから、名古屋に移って、同じ流派の内藤先生の道場に入門した。

私の印象では、同じ段位で比較すると、合気道の昇段試験の方が居合道のそれよりも難易度が高く、合気道の二段というとかなりの腕前が期待できるが、居合道の二段というと、まだ「ひよっこ」の印象がある。居合道では、全国剣道連盟が制定した「制定居合」という流派に依存しない型（１０種類、のちに更に２種類追加された）があり、各流派の技は「古流」（「個流」？）と呼ばれている。昇級／段試験では（確か）居合道二段くらいまでは制定居合の技だけやるが、三段以上になると「古（個？）流」の技も見せる様だ。

居合道をやってて体得できた事のうち、一番役立ったのは、「肚（はら）の座った」姿勢が取れる様になった事である。若い頃、私はしばしば腰、ひざ等を故障していたのだが、居合道をやって以来、「肚が座って」いた為もあってか、故障をする頻度は大幅に減少した。

どちらもパッタリやめてしまってからはや１５年以上経つのだが、技はほとんど忘れかけてはいるものの、これら「受け身」「足さばき」「肚の座った姿勢」に関しては、今でも役立っている。

両方ともパッタリやめて、再開できなかった事以外では、一つだけ大きな後悔がある。それは、人の「急所」について真剣に勉強しておかなかった事に対してである。折角、「合気道」「居合道」という武道を習っておきながら、「急所」をしっかり勉強しなかった、という事は、さばきや技のポイントがしっかり定まっていなかった事を意味する。きちっと「急所」について学んでおけば、もっと真剣かつ精密に稽古が出来ていただろうに、、、と思うと、今更ながら残念な気がしている。

とは言え、合気道および居合道を習ったことにより、武士の精神や生き様にも憧れる等、私のその後の人生がその影響を少なからず受けた事は疑いようのない事実である。

拘束されても出来る筋トレ＆ストレッチ

江澤　潔［手書き：2021/01/08-09; 電子文書化：2021/03/25］

（２０２１年１月）現在、私はベルトで両腕と腰をベッドに固定されているが、それでもしぶとく筋トレとストレッチをやって、出来るだけ「身体の衰え」を遅らせようとしている。（主に、「アポロ・エクササイザー」等と同様のアイソメトリック系の運動である。）ここで、それらの運動メニューを紹介する。

［注：ベッドにはしごを横にした様な手すりが付いている場合。］

（１）腕の筋トレ

A)　[腕を曲げる筋肉のトレーニング] 腕の固定位置より脚方向の手すりの縦棒を握り、腕を縮める様に力を入れて２０秒間保持する。（これを片腕３セットずつ）

B)　[腕を伸ばす筋肉のトレーニング] A と同じかそれより一つ頭方向の手すりの縦棒を握り、腕を伸ばす様に力を入れて２０秒間保持する。（これを片腕３セットずつ）

（２）脚の筋トレ

A)　[脚を蹴り下げる筋肉のトレーニング] 腰の固定位置より５０～６０ cm ほど脚方向の手すり縦棒を踏む様にして、脚を蹴り下げる様に力を入れて２０秒間保持する。（これを片脚６セットずつ）

B)　[脚を蹴り上げる筋肉のトレーニング] Ａと同じ縦棒に脚側から足指の付け根を当て、脚を蹴り上げる様に力を入れて２０秒間保持する。（これを片脚6セットずつ）

（３）腹筋の筋トレ

あお向けに身体を伸ばし、腰を中心にして上体＋頭をほぼ一直線にして１０cm位上げ、また、両脚を一直線にして１０cm位上げて（呼吸しながら）保持する。（視線は足つま先方向）（これを１セット６０秒間で３セット）

（４）腰の柔軟運動

A)　あお向けに寝転んだまま、片脚をもも上げし、そのままその脚をもう片脚を越えて反対側につける。（手で補助しても良い。）その片脚側の肩＆腕はベッドにつけたままにする。（片脚１セット４０秒を左右２セットずつ）

B)　あお向けのまま、ひざを曲げて、脚を閉じてベッドの左右にひざを交互につける様にする。（２０セット）

C)　あお向けのまま、ひさを曲げて、脚を少し開けて左右のひざを交互に両脚の真ん中につける様にする。（２０セット）

（５）脚の背中側の柔軟運動

あお向けのまま上体を起こして、両脚を伸ばし、足首は出来るだけ手前（頭側）にそらす様にし、上体を前（脚側）に少しずつ倒し、それ以上行かない所で呼吸しながら保持する。（１セット４０秒間を３セット）

（６）血栓防止運動

もう一度上体を起こして、両脚を伸ばしたまま、足先を前後に出来るだけ大きくパタパタ動かす。（２０往復）

（７）背中＆肩甲骨まわりの筋トレ

もう一度上体を起こし、両脚を伸ばしたまま、（身体全体を少し脚側に移動し、）拘束されている腕を伸ばしたまま、背中の後ろで手を合わせる様に力を入れ、保持する。（１セット２０秒を５セット）

（８）肩の筋トレ

もう一度上体を起こし、両脚を伸ばし、（腰は腰ベルトの位置に戻し、）片腕を伸ばしたまま上方に引き上げ、限界のところで保持する。（片腕１セット２０秒を左右３セットずつ）

（９）背中の筋トレ＆柔軟

あお向けに寝転がって、左を向き、右腕を背中の後ろに出来るだけ伸ばし、左脚も背中の後ろに出来るだけ伸ばす。左右入れ替え、繰り返す。（片側１セット６０秒を左右２セットずつ）

（１０）上体全体の柔軟

A)　上体を起こし、両脚を伸ばし、腰より少し前の手すり縦棒を両手で掴んで、筋肉をリラックスさせて上体を後ろに倒し、しばらくそのままにする。その後、今度は肘を手すりにつける様に腕を縮めてしばらくそのままにする。

B）　上体と脚はそのままで、今度は腰より少し後ろ（頭側）の手すり縦棒を両手でつかんで、筋肉をリラックスさせて上体を前に傾け、しばらくそのままにする。その後、今度は肘を手すりにつける様に腕を縮めて、しばらくそのままにする。

［以下おまけ］

（１１）肋骨（ろっこつ）の柔軟（？）運動

枕を縦にして腰の後ろにつけ、その上に寝転がって、ゆりかごの様にゆらゆらする。

（１２）腰を伸ばす運動（アルマジロ運動）

あお向けになり、両脚を伸ばしてから、両ひざを胸の方へ引き寄せ、両腕（もしくは布団）をすねの向こうに回し、さらにきつく引き寄せる。（６０秒間）

以上である。ちなみに私は（1）～（１２）を１ラウンドとして１日６ラウンド、

更に追加して、（2）を１日２～３回、行なっていた。

[補足]（拘束がゆるい又は外れた時）肩周りを柔らかくするよく効く体操

[手書き：2020/01/11; 電子文書化：2020/03/25]

看護師のＡさんによく効く体操を教わったので記しておく。

1）上体をまっすぐ立てて、両腕を水平まで上げ、親指を上に向け、そしてひじを９０度程曲げる。

2）息を吸いながら天井を見上げ、両ひじを後ろに引いて、左右の肩甲骨をつける様にする。

3) 息を吐きながら今度は床を見る様にして、肘を目の前に持ってきて両ひじを合わせる様にする。

4) を 2)～3) を３～５回繰り返す。

年賀状２０２１

江澤　潔 ［手書き： 2021/01/10; 電子文書化：2021/03/22］

２０２１年の正月は、例年とはひと味も、ふた味も、み味も、、、違った正月だった。と言うのも、私は前年の 10 月 30 日（金）に自殺未遂を起こし、それからずっと、とある病院の精神病棟に収容されているからだ。私の心の中では、私は「既に死んだも同然の身」なので、のほほんと「あけましておめでとうございます」等と新年の挨拶をする気分には、とてもなれなかった。

　　そんな折に、家族が、私宛に送られて来た年賀状を届けてくれた。私は人付き合いが非常に狭いので、例年出す（およびもらう）年賀状は（それぞれ）２０通前後である。

その内訳は、親類、私の研究生活の経路でお世話になった元受け入れ教官＆元上司、そして、阪大合気道部の同輩および一部の先輩後輩のみである。そして、重要な事だが、私は（既にその年に付き合い又は交流がある事が確定している人を除くと）決して「今年もよろしくお願いします」という文言は入れなかった；何故なら、それらの人々とは向こう１年間、会うことも連絡を取り合うこともないと確信していたからだ。その代わりに私は、

「今年も○○さんやそのご周辺の方々のご健康とご多幸を心よりお祈りします」

等の当たり障りのない文言を入れた。

さて、今年の年賀状を私に届けるにあたり、家族は「返信を出す様に」とメッセージをくれたが、私の気分は「既に死んだも同然の身」なので、のほほんと返信を出すきにはとてもなれない。ここら辺が、私と家族の間での「生死」（あるいは私の今の状況）に対する意識の決定的な違いなのであろう。とは言え、せっかく年賀状をくれた相手に返事を出さないのも失礼だし、申し訳ない気がするのも確かである。

そこで、ここに、私からの返信を示す事とする：

拝復、○○様、

2021 年の年賀状を下さいまして、まことにありがとうございます。

お返事が遅れてしまい、大変申し訳ありません。

ちまたでは、新型コロナの大流行で大変なことになってますが、

どうかくれぐれもお気をつけ下さい。

末筆ながら、

2021 年の ○○様とそのご周辺の皆様方のご健康とご多幸を

心よりお祈り申し上げます。

敬具

２０２１年正月

江澤　潔

阪大合気道部の思い出

江澤　潔［手書き：2021/01/09-10; 電子文書化：2020/03/25-26］

私は１８歳で大阪大学に入り、武道系体育会系の合気道部に入り、三回生の終わりで現役引退するまでの３年間（１９８７年４月～１９９０年３月）では、クラブ活動は私の学生生活の大事な一部を成していた。以下、今でも強烈に思い出に残っている出来事のうち幾つかをお話しする。

[1] 最初のいちょう祭[8]、「臍下丹田（せいかたんでん）」（１９８７年５月）

合気道部に仮入部して最初のイベントは、いちょう祭で二回生が運営するホットドッグ（？）売りを手伝う事であった。最終日には「一升瓶早飲みレース」等にも出場させられ、私はレースが終わるとトイレに直行して吐いたが、一回生の中には吐かないでそのままの「強者」達もいた。

しかし、実は、一回生にとっての「本番」は、この最終日の夕方にやって来た。二回生の運営するホットドッグ屋のテントの裏側に、逆U字型にテーブルと椅子がセットされ、主将を一番奥にし、他の幹部（三回生）達がそれらの椅子に座った。二回生の話によると、これから一回生（男子）は、一人一人呼び出され、幹部の前で「自己紹介」し、一芸を披露するのだと言う。次から次へと一回生が呼び出され、主将や内務等に酒（「鬼ころし」）をつがれてつぶされていった。

、、、その中には、「一升瓶早飲みレース」での「強者」達もいた！、、、

そして、いよいよ私の番になった。私がまず、内務がついでくれた酒（紙コップ一杯）を飲み干し、小泉今日子の「常夏娘」を大声で歌い出すと、何故か場が異常に盛り上がり、あちこちで手拍子が上がった。私が歌い終わっても手拍子が鳴り止まないので、「アンコール」の催促と解釈した私は次に松田聖子の「天使のウィンク」を大声で歌った。こちらも拍手喝采で終わり、主将から「褒美の一杯」を頂き、飲み干すと、解放された。しかし、私以外で「生き残った」のはあと一、二名程度で、他は「全滅」した。

これが、私が「この部はただものではない！」と予感した最初だった。

その後、新歓合宿では夜通し、歌合戦、ゲテモノ早食い、「主将／副将攻撃」、etc. と、あるOBが「狂気の集団」と表現する様なイベントが続き、一睡も出来ない恐ろしさも味わい[9]、正規の阪大合気道部員として迎え入れられる事となった。

8　「いちょう祭」とは、大阪大学の「春の学祭」的なイベントで、GWのあたりに行われる。

[2] 二度目のいちょう祭、「ほっ、ホッ、北海道～」（１９８８年5月）

阪大合気道部において、二回生の役割は「盛り上げ係」である、恐らくはその一環として5月のいちょう祭と11月の学祭の時は、何か店を出す。この年は（私の記憶が正しければ）たこ焼き屋を出店した。（しかし、「たこ焼き」と言いつつ、中身にクリームやらチョコやらあんこやらを入れていたので、むしろ、ミニシュークリームの出来損ないの様な代物になっていた様な記憶がある。）

例年は、この出店に加え、「一升瓶早飲みレース」に出場するくらいで済んだのだが、この年は一味違った。と言うのも、「新企画」と称して体育会主催（？）で「ラブ♡アタック」なる、とあるテレビ番組のパクリの様なイベントが催されたからである。そして、その「ラブ♡アタック」の競技者の一人として、二回生になってから「我が部の変人」として体育会誌に紹介されたり、また、一部幹部の「おもちゃ」にされつつあった私に白羽の矢が立った。

イベントでは、まず、「かぐや姫」役の女の子が紹介され（私は視力が弱いのでどんな女性だったのか分からなかった）、次に競技者達の自己紹介があったので、私は「合気道部は新入部員募集中です」と紹介し、幹部達にコビを売っておいた。そして、「かぐや姫」からの質問で、「好きなアイドルは？」と聞かれたので、他の競技者達が「小泉今日子」や「南野陽子」等と答える中、私は「東海林（しょうじ）太郎」とボケをかまし、一本取った。よしっ、「つかみ」はOKだ！！

続いて、最初の競争として「風船割りレース」が行われた。これは、競技者のつま先に画鋲を貼り付けて、上から吊るされた風船をその画鋲で割る競技である。合気道部でも屈指の体の柔らかさとそこそこのジャンプ力を持つ私はこの競技で一ヌケし、観衆をオッと言わせた。

9　この最初の新歓合宿後の校内合宿（年二回）では、講義をサボって睡眠をとる、という「裏技」を多用する様になった。

そして次が忘れもしない「早飲みクイズ競争」であった。これは、司会がクイズを出して、その後最も早く缶ジュースを丸ごと一缶飲み干した競技者が答えて当たったら一点追加される競技である。そして、この時に出されたジュースが、あの「バクコール」であった！これは甘味料の入ってない麦茶の様なベースに炭酸をコーラ並みに溶かし込んだ、（恐らく）一種の「なんちゃってビール飲料」であり、（常温であることも手伝ってか）ものすごく不味（まず）かった！！しかも、炭酸がしこたま溶けているので、特に缶入りだと、ものすごく飲みにくい！！そしてこの競技で出された１問が、

「日本で一番緯度差が大きい都道府県は？」

という問題だったが、「緯度差」を「高度差」と聞き間違えた私は、

「日本一高い山である富士山は静岡にある。そして、静岡は海にも面している！」

→答えは、「静岡県」だ！

と思い、自信満々でバクコールを飲み干し、回答権を得た。そして、司会が問題を再び読み上げ、自分が聞き間違えた事に気づいた！！、、、後悔、先に立たず、、、！

とっさに私は考え、「北海道が一番広いから、きっと北海道だろう」と、日本に島々が幾百（幾千）もあることを忘れて考えてしまい、かの有名な、

「ほっ、ホッ、北海道〜〜」

という答えを叫びあげ、司会者が

「ブーッ』「正解は、東京都です」

と言った。、、、しまった、離島のことをすっかり忘れてた！！　しかしながら、その後もバクコールを途中で吹き出す等、悪戦苦闘しながらも、その競技を勝ち抜いた。

残り三人となった次の競技は、シンプルに「早食い競争」であった。その時は「リッツ」（クラッカーの一種）が一皿出された。「それだけでは食べにくいだろう」と言うことで、またも「バクコール」の紙コップ入りが添えられた。そして、「かぐや姫」から、

「今度はきれいに食べて下さい」と、明らかに私にあてつけたコメントを頂いてしまった、、、(T T)。

私はこの時考えた。「ここで一ヌケしなければ、OB 達に『鍛え方が足りない』と言われて、我々二回生が新歓合宿で早食いの『特訓』をさせられかねない！」そこで、またも死に物狂いで「リッツを噛み砕いてバクコールで胃に流し込む作戦」を実行し、見事一ヌケした。これには OB 達もご満悦のご様子だった。

そして、最後（決勝戦）は、競技者が向かい合った真ん中にタライとピコピコハンマーが置かれ、ジャンケンをして勝った方がピコピコハンマーで負けた方をたたき、負けた方はそれをタライで防ぐ（タライで防ぐ前に叩けたら１点）、という古典的なゲームだった。私は、相手（恐らく一回生）の（数々の理不尽な競技で苦しめられた後の）「怒りのオーラ」に圧倒され、残念ながら敗退してしまった。しかしながら、クイズで吹き出したバクコールでビショビショになった私が勝ち残っても、「かぐや姫」は OK してくれなかっただろうから、まあ、最適なところで負けたと言えよう。

、、、こうして、私は奇（く）しくも強烈（？）な印象を観客達に植えつけて、

競技場を去って行くのであった、、、

この年は、夏合宿でも「ねるとん紅鯨団」のパクリの様なイベントに一回生達と共に参加させられ、（卵で）「自爆」させられたりと、散々な年であった。

、、、こうして「たくましく（？）」育った私は、翌年、幹部になるのであった。

[3] 「てめーら！そこで何しとんジャア！！（怒）」

=> 「よう、お前ら、そんな所でどうした？(^_^)」（１９８９年８月）

阪大合気道部では、１年間に新歓・夏・秋・春と４回の合宿があり、そこで１＆２回生は様々な「試練」を乗り越え、幹部（３回生）への階段を上ってゆく。一回生が夏合宿で経

験する最大の「試練」が「主務攻撃」である。夏合宿の最終日の前夜（イブ）、一回生（男子）が「ご恩返し」と称して、皆で主務を押さえ込み、卵を主務のパンツの中で割るのだ！！[10]

しかし、いきなりやっても「技」の未熟さや恐怖心および良心の呵責（かしゃく）等が邪魔してうまくいかない。そこで、前者２つを取り除くため、「練習」が数回行われる。最初に「練習台」となるのは大抵、二回生（男子）であり、最後の１、２回に「練習台」になるのは、大抵、主将・主務以外の幹部（男子）である（特に副将が多い）。

副将の一人である私は「練習台」の最適な候補であったので、その覚悟というか心の準備は出来ていた。しかしながら、あまり簡単に押さえ込まれたのでは、「練習台」としての役目は果たせないだろう、と考えた私は、多少の抵抗をするつもりでいた。

最終日前夜、しばらく待っていると、案の定、一回生（男子）達が私が寝ていた部屋（主務部屋）のドアの前にやってくる音が聞こえた。そこで一回生がドアを開けた瞬間、私は上体を起こし、目一杯ドスを効かせた声で、

「てめーら！そこでなにしとんジャア！？（怒）」

と怒鳴りつけて、すごんでみせた。すると、私の予想に反し、一回生達は、まるで「潮が引いた様に」ソロソロと帰って行ってしまった、、、！

「想定外」の出来事に私はパニックに陥った。

「あれ？俺、何か間違った事したかな？」

「ちょっと怖くし過ぎたのだろうか？」と考えた私は、次に一回生が来たらもっと優しく声をかけようと思った。そして、一回生達が再びやって来た。そこで、私が、今度はいつもの様な優しい調子で

「よう、お前ら、そんな所でどうした？(^_^)」

10　ちなみに、普段、卵を一部員のパンツの中で割るのは「極刑」と呼ばれている。また、自分で割るのを「自爆」と呼ぶ。

と尋ねると、今度は一回生達が一斉にかかって来た。、、、何てゲンキンな奴らだ！！私は誰も怪我しない様に気をつけながら、形ばかりの抵抗を示したが、押さえつけられ、一回生達は、無事、私のパンツの中で卵を割った。、、、その後、一回生達が無事、主務に「ご恩返し」を果たした事を知った。

それから何年も経って、OB になった当時の一回生男子の一人がその時の（一回生サイドの）いきさつを話してくれた。私が怒鳴りつけて一回生達が帰った後、彼らの間では「俺ら、どうしてこんな事しなくてはいけないんだろう？俺、クラブを辞める。」という話しすら出ていた様であった。[私からすると、彼らには、「恐らく幹部も一回生の時、同じ様な経験をしているハズだから、本気では抵抗しないだろう。」と言う考えはなかったのだろうか？（、、、ひょっとして、（当時の）主将のせいか？）、、と多少疑問に感じたものの、、、。]

もし、そのまま辞められていたら、大変な事（例えば「クラブ断絶」等）になった可能性もあるので、私があの時態度を「豹変」させたのは、結果的にではあるが「正解」だったのであろう。まあ、私の幹部（および副将）としての「威厳」は多少下がったかも知れないが、そんなものは始めからあってない様なものなのだ。

ちなみに、無事、かくして夏合宿の「試練」を乗り越えた当時の一回生達は、その後立派な幹部に育ち、不幸な大事故に見舞われたものの、見事、部の存続を守った。私は「子供の代」である彼（女）らを誇りに思っている。

続・「囚われの身」

江澤　潔 ［手書き：2021/01/11; 電子文書化：2021/03/20］

私が（2020/10/30 に）自殺未遂を起こしてから約二ヶ月半、また、（2020/12/15 に）二度目の試みに失敗してから約一ヶ月程過ぎたが、私はいまだに「囚われの身」を続けている。一刻も早く「本来の状態」（つまり死ぬ事）になりたいのだが、二つの大きな要因により、それが妨げられている。

<要因 1 > 心電モニターの存在

先ず、普段拘束されているときは、胸に簡易モニターを取り付けられて監視されているので、何か異常があったらすぐに看護師さん達が駆けつけられる様になっている。従って、中途半端に弱った（あるいは傷ついた）状態ではすぐに ICU に運ばれて蘇生させられてしまうので、「一撃必即死」の手法でないとやっても意味がない。更には、中途半端な状態から蘇生しても、植物人間や半身不随等になると、多額の医療費がかかる上に、次に自殺を試みるのすら不可能になるので、それだけは何とか避けねばならない。

従って、結局、この心電モニターが外れた時しか「決行」はできない事になる。

<要因 2 > 私自身の信条

私が自殺する最も大きな理由は、「約束」（又は「宣言」）を果たし、自身の「誠実（まこと）」を貫き、（正直者であるという）「誇り」を守る事である。

心電モニターが外れて看護師さんが一人しかいない時には、この看護師さんを気絶させれば自殺も試みられるが、そこまでしてしまっては「誠実」を貫いたことに傷が付き、（ただ、「死」を目的としているので）本末転倒となってしまう。同じ理由で、病院側を騙してしまっては、やはり「誠実」を貫けず、本末転倒である。従って、私が「決行」できる機会とは、次の２要件を満たした時となる：

(1)心電モニターが外れた時；

(2)看護師さんが近くにいない時。

2020/12/15 に試みようとした時は、一時的にこの２要件が同時に満たされていたが、その後、同時に満たされた時はない。

そんな訳で、私はまだ、「囚われの身」を続けているのだ。

しかしながら、最近は看護師さん達もかなり「疑心暗鬼」になっている様で、必要以上に拘束は堅い。上記要因を見れば、私は心電モニターを付けられ、腰を拘束されていさえすれば「決行」はできない事が分かる。[11] それにも関わらず、両腕を拘束され、食事の時の一時的な両腕拘束伸長も本当に短い間で、食事後の腸の運動促進する体操すら満足にできないこともあるが、これは何とかして欲しいものである。

こんな訳で、なかなか状況は厳しいが、きっといつか、私は何とかして成功させ、「誠実」を貫き「誇り」を守る所存である。

11 残念な事に、私は手元の道具で「一撃必即死」できる術（すべ）を知らない。

「奇蹟の人」

江澤　潔　[2021/01/11; 2021/03/26]

先日、看護師のＡさんに「肩周りをほぐす体操」を教えてもらったが、これは非常によく効き、最近、拘束のせいもあり固まりつつあった私の肩も一気にほぐれ、「二段階」くらい柔軟になった様な気がする。私は「これは、奇蹟の運動だ！！」と感じた。

　そこで、ふと思ったのは、ひょっとしたら（お釈迦様やイエス・キリスト等も含む）「奇蹟の人」と呼ばれる人々は、実はこういったちょっとした「奇蹟の手法」を数多く知っていた人達ではなかろうか？という憶測である。

　一つの「奇蹟の手法」を適切な相手に用いれば、まるで「奇蹟」が起きた様にその人の状態は改善する。従って、複数の「奇蹟の手法」を心得ていれば、その人が「手をかざした」だけで、病気が治った様に錯覚してしまうかも知れない。

　そしてそのうち、うわさが広まり、それに尾ヒレ背ヒレがついて「伝説」となり、その人は「奇蹟の人」として祭り上げられる様になったのかも知れない。

　、、、まあ、これはあくまでも推測ではあるが、「当たらずとも遠からじ」かも知れない。

「正義の味方」

江澤　潔　[手書き：2021/01/14; 電子文書化：2021/03/22]

私も幼少期は、例に漏れず、特撮ヒーロー物は好きだった。「正義のヒーロー」、例えばウルトラマンや仮面ライダー、キカイダー、ゴレンジャー達は、怪獣や怪人等、「悪の使者」が街を破壊したり人々を苦しめたりしているとさっそうと現れて、「悪の使者」を倒して去ってゆく。、、、と言うのが、大体お決まりのパターンである。

**　　子供の頃は無条件に、「正義のヒーロー」を「善」、と考えるのを受け入れて、ヒーローになりたがったものである。**

**　　しかしながら、今、人間達が地球上に溢れかえり、自然環境や生態系を破壊しまくっている現状を鑑みると、こういった単純な「勧善懲悪」の構図は受け入れにくくなっている自分がいるのに気づかされる。**

むしろ、自然環境の破壊を進める人類こそ「悪」であり、それらを懲らしめる怪獣や怪人こそ、「善」なのではないか？[12]　もし、そうだとすると、「正義のヒーロー」達は、「悪」である人類を「善の使者」の攻撃から守る、「悪の用心棒」の立場と解釈できる。

、、、さて、あなたはどう考える？

和氏（かし）の璧（へき）

江澤　潔 ［手書き： 2021/01/14; 電子文書化：2021/03/22］

「完璧（かんぺき）」（璧（へき）を完（まっと）うして帰る）の故事で有名な「和氏（かし）の璧」は、その成り立ち自体、教訓的である。

大昔、中国のある国（楚だったと思うが定かではない）のある男（「べんか」だっけ？）が、この世に二つとない程立派な璧の原石を見つけ、王に献上しようとした所、王

12 ただし、宇宙から来た怪獣や怪人（あるいは宇宙人）に関しては、その限りではない。

のお抱えの専門家が「単なる石コロだ」と鑑定し、その献上者は「だまそうとした」罰として片脚を切断された。王の代が変わったので、その男が再びその原石を献上しに行くと、その王のお抱えの専門家も「ただの石ころ」と鑑定し、その男は残った片脚を切断された。更に王の代が変わると、両脚のない老人が石ころを抱えて泣いていると言う。王の使者が何故かと訳を聞きに行くと、立派な璧の原石を献上したいが、また石ころと鑑定されたら今度はどうなるだろうと考えると悲しいと言う。そこで王（？）が、「そんなに言うなら、その石を磨かせてみては？」と提案し、その石を実際に磨いてみると、この世に二つとない立派な璧が出来、その男の誠意を称賛するため「和氏（かし）の璧」と名付けた、と言う話である。

ここでの大切な教訓は、

「常識をはるかに凌ぐほど良い物というのは、えてして、その時代の専門家や鑑定士でも、その真価は分からないものだ」

という事である。

科学の分野でも、振り返って見れば、コペルニクスの地動説、アボガドロの分子論、メンデルの遺伝の法則、ボルツマンの分子運動論、等々、今日の科学の各分野の土台を成す多くの学説や発見は、それらが認められるまでに数十年～数百年もかかっている。つまり、それだけ「（当時の）常識をはるかに超えていた」と言う事である。これが、一見何だか訳が分からない様な研究結果（理論や法則）も無下に捨て去れない理由である。

ちょっと似た様なことわざに、「馬鹿と天才は紙一重」がある。「天才」は凡人（常人）の思いもつかない事を考えついてしまう故に、（良い意味で）「常識外れな」理論や法則を提唱してしまい、常人には難しすぎて解らない事がしばしばある。その為に「馬鹿」と区別がつきにくいのだ。

区別をつけるには、その人のそれまでの経歴を調べるのは一つの手かも知れない。つまり、過去に何らかの研究業績があるならば、多少は信用できる、と言う事になる。し

かしながら、「真の天才」は、「処女作」からして超ド級の大理論を提唱したり、さらには、あまりにも利口すぎて小中高の時点で先生にも理解不能となり、学校を追い出されているやもしれない。そんな場合には、その「天才」を単なる「馬鹿」と区別するのは非常に困難だと言えよう。

その様な「真の天才」達を発掘し、育てる様な全国的（あるいは全世界的）なシステムが築ければ、科学の分野はもっと速く発展するかも知れない。[私の感覚では、日本は欧米等に比べ、そういう「真の天才」への許容度はずっと低そうである。早急な対策を願っている。]

自殺の影響力

江澤　潔　[手書き： 2021/01/15; 電子文書化：2021/03/22]

姉が私に宛てた手紙に、

「自殺は他の原因による死よりも影響力が強い」

とあった。確かに、自殺は連鎖を引き起こす等、影響力が強いイメージがある。しかし、それらは本当に自殺のせいなのか、釈然としない部分もある。そこで、いかに、ケースごとに分けて自殺の影響力について考察してみる。

［ケース１］「いじめ」を苦にした自殺

ある学校で、生徒Ａが「いじめ」を苦に自殺し、その後、「いじめ」の首謀者Ｂおよび／あるいは担任教師Ｃが自殺したとする。

この場合、外見上は、Ａ→Ｂ and/or Ｃと、自殺が連鎖しており、Ａの自殺がＢ and/or Ｃの自殺に影響した様に見える。しかし、この場合、「いじめ」という問題が根本原因としてあり、「いじめ」がありながらもそれを無視もしくは黙認している学校の体質そのものが問題である。（人によっては、Ｂ and/or Ｃの自殺は「自業自得」とまで捉えてしまうかも知れない。）

いずれにせよ、Ａが自殺する前に「いじめ」を発見かつ解決していれば、この様な事にはならなかったハズであり、Ｂ and/or Ｃの死を、最初に自殺したＡのせいにするのは的外れだと言えよう。むしろ、Ａのおかげで、この学校の体質の問題点が明るみに出て、それ以降、この学校での「いじめ」が減ったのなら、Ａの自殺には「殊勲賞」をあげても良いのかも知れない。とは言うものの、やはり、ベストな解決策は、Ａが自殺する前に「いじめ」を解決する事である。同様に、Ａの自殺後、多くのクラスメートが落ち込んだとしても、その「根本原因」は、「いじめ」がそこまでエスカレートした事にある。

［ケース２］有名芸能人の自殺

ある有名芸能人Ａが自殺し、その後その事務所の関係者（マネジャー等）数名が自殺、又、多くのファンも「後追い自殺」したとする。

この場合、まず、事務所関係者の自殺の原因はおそらく二種類ありうる：(i) 監督もしくは管理責任をとって；(ii) ビジネスの取引量の激減。

いずれにせよ、Aの自殺には何らかの原因があったハズであり、それにマネジャーやその他担当職員等が事前に気付いて解決さえしていれば、この様な事にはならなかった。そう言う意味では、(i) は当然の事であり、また、そのせいで取引が減ったなら、それは「自業自得」とも言える。結局のところ、悪いのは、Aを自殺に追い込んだ原因を解決できなかったこの芸能事務所であり、自殺したAではない。

次に、「後追い自殺」したファン達であるが、そこまで熱狂的に夢中になれる物を持っていた彼らはむしろ、幸せだったのではないか、という考えもあるかも知れない。これも、自殺したAを責めるのはやはりおかしく、まずは、自殺を止められなかった芸能事務所を責めるべきだし、更には、そのファンの家庭環境や学校／職場の環境はどうだったか調べてみるべきであろう。

まとめると、事務所関係者の自殺は「自業自得」、ファンの後追い自殺は、確かに、Aの自殺によって引き起こされているが、それは、自殺の影響力というよりはAの影響力のせいである、と言えよう。

［ケース３］会社での不正発覚

ある会社で、平の社員Aが、ある不正に関わった事を苦にして自殺し、その後、その不正が明るみに出て、不正の首謀者であった上司Bも自殺したとする。

この場合も、根本原因は、不正を隠蔽（いんぺい）しようとしていたこの会社の体質にあり、最初に自殺したAにはむしろ「殊勲賞」を与えても良い。もちろん、一番良い解決策は、会社が不正をしない事、あるいはこうなる前に不正を自ら公表し（人々に）謝罪する事であろう。

［ケース４］一家の大黒柱の自殺

A さんはある家庭の大黒柱で、妻 B と子供 C, D を扶養していたとする。

いきなり A さんが他界したら、B と C, D は経済的その他苦しい状況に置かれるのは間違いない。しかしながら、その死因が自殺であれ、他殺であれ、事故であれ、又は急性の重篤な病気（脳溢血や心筋梗塞等）であれ、経済的な影響は対して差はない。（むしろ、病気やケガの際は、医療費が余計にかかるかも知れない。）ただし、ゆっくり進行する重篤な病気（ガンや AIDS 等）の場合には、死までの間に精神的に受け入れる期間はあるやも知れない。

しかし、精神的には、妻や子供は「どうして A は私たちを置いて自殺したのか？」と、さいなまれ易い。だから、どうしても止むを得ず自殺をする際には、それは彼（女）らのせいではない事を明記し、真の理由を詳述した遺書を残すのは不可欠である。

［まとめと議論］

この様に、自殺に影響力がありそうな多くのケースでは、その自殺者が所属する組織（学校、会社、etc.）に根本原因がある場合がほとんどであり、それ以外のケースでも、自殺そのもの、と言うよりは、自殺者の影響力が原因となっている事がわかる。

その他、何故か日本人は特に、知人が自殺するとすぐに「自分にも原因がある」と思い込み、自責の念に苦しむケースが多いので、それを未然に防ぐ為には、自殺の原因を詳述した遺書等を書き残す事が不可欠となる。

上記考察より、私は自殺に影響力がある様に見えるケースのほとんどでは、自殺そのものよりも、自殺者自身、あるいはその所属組織に影響力や問題の根本がある、と考える。

しかしながら、影響力の強い人物が自殺すると、多くの人々が「後追い自殺」し兼ねないし、また、普通の個人の自殺でも、彼（女）に扶養されていた人々が経済的に困窮

する可能性が高いので、自殺をする前に、自らの影響力について十分に考察し、あまりに大き過ぎると判断したら踏みとどまる「英断」を下すのも肝要であろう。

　また、他殺同様、自殺でも他の死因と較べて死体の損傷が激しくなり易く、その事から目撃者／発見者や遺族にトラウマを引き起こし易いのは事実であろう。従って、自殺する前に手段を十分に吟味する事も大切である。

延命治療

江澤　潔　[手書き： 2020/01/16; 電子文書化：2020/03/23]

私はあまり医療関係の法規に詳しくないが、聞いたところによると、日本では延命治療を拒否する権利があるらしい。これが暗示する事は、日本では患者が明白に拒否する意思表示をしない限り、延命治療が延々と（患者が息絶えるまで）続けられると言う事だ。この「延命治療がデフォルトで続けられる」事に帰因して、治療費の高額化や患者の家族の束縛等、「悲劇」的な事例もあると聞いたこともある。

私は、その様な「悲劇」を起こさない為に、回復の見込みがない、あるいは非常に低い（例えば X% 以下、X は議論の余地あり）と分かった時点から短い期間（例えば Y 日間、Y は議論の余地あり）だけ、延命治療を続け、その後は止めるのをデフォルトとしたらどうかと思う。その間に、もし、患者側が望むなら延命治療を更に続ける様にしたら良い。［これも例えば、一週間とか一ヶ月間とか「細切れ」にし、その都度、更に続けるかどうか選択させる様にするのが良かろう。］ その延命治療を保険適用可にするかどうかは、議論の余地があろう。

この様な、生死に関する事柄に、人々はつい感情的に反応してしまいがちではあるが、国民全体を巻き込んだ、冷静で理性的かつ真剣な議論が行われることを願う。

私の”最終戦術”：「四面楚歌」を囲う

江澤　潔［手書き：2021/01/17; 電子文書化：2021/03/23］

昨年夏に私は「最後の研究プロジェクト」を終えた。この研究は、MSA（multiple sequence alignment, 多配列並べ）の手法の研究と、分子進化の研究分野との間（はざま）に位置するものであり（図１）、DNA 部分配列の挿入／欠失を現実的に記述する真の配列進化モデルを複数の MSA（多配列並び）の「確率分布」に用いることにより、解析の正確さの限界を取っ払おう、と言うものである。
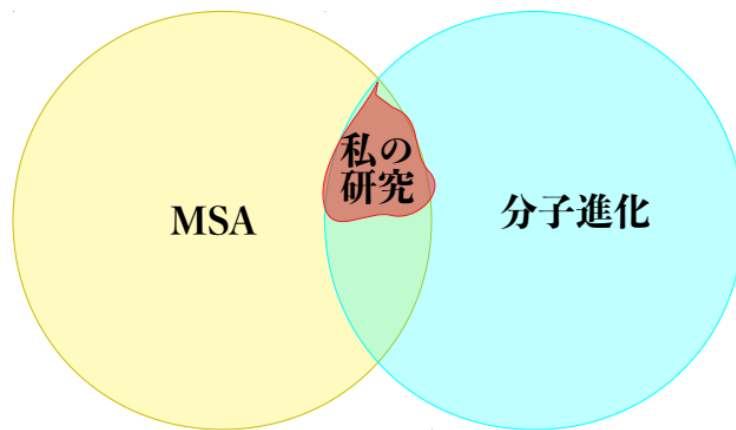
図１、私の研究
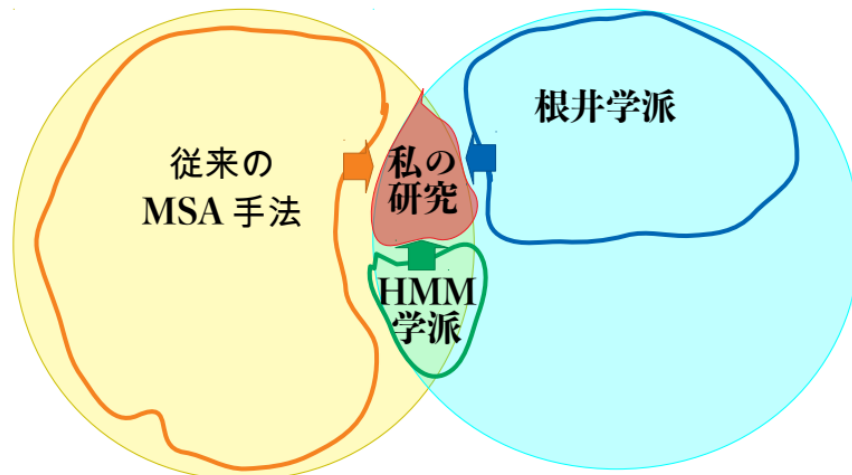
図２、「四面楚歌」的状況

しかるに、私のこの研究は今、ほとんど「四面楚歌」の状況にある（図２）：この研究と同じ「統計的 MSA」の手法開発の分野では、従来使われて来た HMM（隠れマルコフモデル）を用いた手法が「既得権益」の甘い汁を奪われまいと抵抗し、一方、 MSA の分野全体では、従来の、単一の最適解を求める手法を開発する人々が抵抗している。そして更に、分子進化の分野では、従来型の解析手法を好む根井一派の抵抗がある。（この根井一派には、私のかつての受け入れ教官らが属しており、「既得権益」の問題だけでなく、彼らの私に対する（誤解に基づく）個人的な「恨み」が絡んでいる様な気がする。）

従って、何もせずに手をこまねいていると、私の研究は、これら分野の進展を正しい方向に導く潜在力があるにも関わらず、この「四面楚歌」の状況下で潰（つぶ）されてしまう可能性がある。

そこで、これに対抗する為に私が考え出した「最終戦術」が、この「四面楚歌」を囲む作戦である（図３）。具体的には、外部の学術分野である（素粒子論も含む）理論物理学の研究者、および（人工知能（AI）も含む）情報工学（IT）の研究者の積極的な参入を促して、私の「最終研究」の産物（LASTPIECE, ANEX, SRD Map）を更に発展させる、というものである。
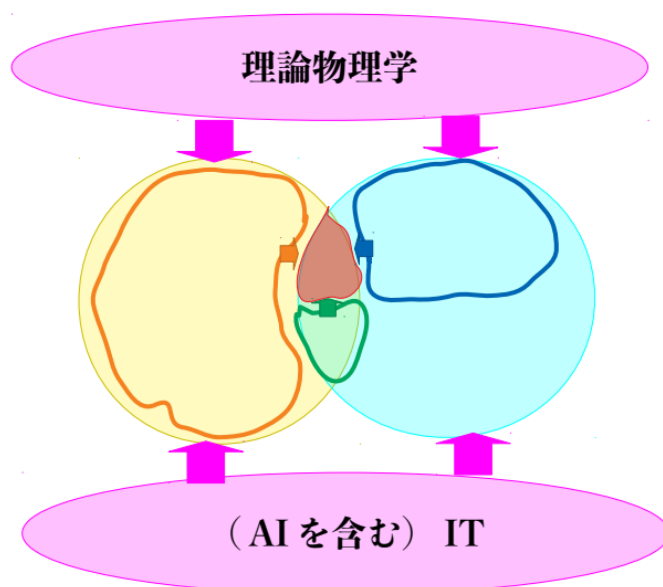
図３、私の最終戦術

私が考えるに、（素粒子論も含む）理論物理学者の参入は、今用いている真の配列進化モデルを更に現実的にするのに欠かせない；今のモデルは塩基置換／挿入／欠失のみしか扱わないが、それに DNA 重複、逆位、転座等を含める事は、もっと一般的な DNA 比較解析には不可欠であり、それに彼ら理論物理学者達の力を借りたいのだ。[13]

また、現時点での私の研究産物、特に ANEX（Alignment Neighborhood EXplorer、配列並べ近傍探索プログラム）、は非常に単純な探索構造を用いているが、もっと一般的かつ速い探索を実現するのに人工知能（AI, artificial intelligence）を用いられるのではないかと、私は考えている。そうした拡張（あるいは一般化）を行う為には、IT 分野の専門家の参入が欠かせない。[14]

こうして、理論物理学と IT 分野の両面からの「挟撃（きょうげき）」により、私の研究は「四面楚歌」から解放され、MSA と分子進化学は正しい方向へ更に発展を遂げられるのだ！！私は既に引退した為、陣頭指揮を取れなくてまことに恐縮だが、「科学の正しい発展」という「大義」に賛同するこれらの分野の優秀な専門家／研究者／科学者たちが積極的に参入する事を、私は願ってやまない。

13 このもっと詳細な議論、および重要な参考文献は、ANEX 論文の Discussions や、bioRxiv に掲示してある Ezawa, Graur, Landan (2015) “Perturbative formulation of general continuous-time Markov model of sequence evolution via insertions/deletions Part IV: incorporation of substitutions and other mutations” で与えてある。

14 詳細は、ANEX 論文、および SRD Map 論文の Discussions を参照。

叱咤（しった）激励

江澤　潔　［手書き： 2021/01/21; 電子文書化：2021/03/23］

「他人にされて（あるいはさせられて）嫌な事を３つ挙げよ」と言われても、その時その時によって答えは変わり得るのだが、ある時の私の答えは次の３つだった：

(1) 他人と比較される事、又は他人と競争させられる事；

(2)「あいつは何でもできる」と誤解されて、苦手な事も出来るものと期待される事；

(3) 叱咤（しった）激励。

(1) が嫌いなのは、私は、人は皆それぞれに長所と短所があり、それらをまとめた個性、あるいは「多様性」を尊重するべきであって、違う人２人（以上）を無理矢理同じ土俵の上で比較したり競わせたりするのは、大抵の場合、無理がある（あるいは不適切である）と考えるからである。かつての「欧米諸国に追いつき追い越せ」の時代には、「欧米諸国の標準」という「物差し」が存在したので、その様な比較や競争も意味があったかもしれない。しかし、「どこに向かうべきか」が見えない現在（いま）、その様な事をしても意味がないばかりか、「突破口」を見い出す為に不可欠な人々の個性や多様性を損なってしまうリスクが大きい。

我々はどうにかして、多様な個性を持つ個人々々を総合的かつ絶対的に評価するシステムを開発すべきだ、と私は思う。

(2) は、私が（数学や英語、プログラミング等）幾つかの事がそこそこ出来る故によく被（こうむ）ったことであるが、本当に嫌である。日本人は、ある人が何か（例えば数学や英語等）出来ると「あいつは何でも出来る優秀な奴だ」と誤解する傾向にある様に思うが、これも長年の間、「偏差値」という一つの「物差し」だけで、人々を比較して来た事の弊害であろう。特に私の場合、もともと大変不器用であり、ある事（例えば、数学や英語）

がそこそこ出来る様になるには、常人の２倍〜３倍以上の努力を要したのだ！という「事実」を認識していないか、もしくは無視している人々があまりにも多すぎる！！［逆に、私が苦手な事（例えば実験やコンピュータシステムをいじる事等）だけを見ている人々は、私を「（全く）使えない奴」と見なしてしまい、それはそれで寂しいところはあるが、、、。］

私は「出来る事」と「出来ない事」とのギャップが激しく、それ故に自身を「発達障害では？」と疑っているくらいであるが、私の様な人間にとっては、この、「あいつは優秀だから何でも出来るだろう」という考え（誤解）は、ただただ、不条理かつ不快である。

最後の(3)が、何故嫌いかというと、他人が私に「頑張れ！！」とか「もっと頑張れ！！」とか叱咤（しった）激励する時には、私は大抵、既に全力で頑張っている（いた）からである。［私は不器用な人間なので、何か新しい事をする時には、大抵、全力を出さねば対応できない。］更に嫌なのは、「△△さんは出来たから、お前も出来るハズだ！頑張れ！！」と、「△△さん」という、「サクセスストーリー」のモデルを引き合いに出される事である。（「△△さん」が激励している本人でも同様である。）何故なら、「△△さん」は、その成功体験に「たまたま」向いていた能力や性格の持ち主だったかも知れないし、あるいは「たまたま」うまくいっただけかも知れないからだ。私が推測するに、この手の「サクセスストーリー」を信じて、同様な努力をして結局うまくいかなかった人々はゴマンといる事だろう。何故、一般に、こういった努力がうまく行かないか、と言うと、次の点の考慮が欠けているからである：(i) そもそも、その「サクセスストーリー」と自分がやろうとしている事とは同じ（あるいは平行）なのかどうか；(ii) 始める前の「△△さん」の（多次元的な）能力、性格、etc. と自分のそれらとの（多次元的な）比較；(iii)「△△さん」と自身が置かれている環境（コーチの有無、施設の有無、器具の有無、etc.）の比較；(iv) この「サクセスストーリー」は偶然か必然か？

(i) (ii) (iii) は、孫子の兵法で言うところの「敵を知り、己を知らば、百戦危うからず」に相通ずるところがあり、自分の能力、性格等の「適正」と、これからチャレンジしようとする事の性質等を詳しく知っておく事は、物事を成功に導くのに欠かせない。

しかし、(iv) は、度々無視されがちであるが、実際問題として非常に重要な要素である。つまり、「△△さん」の成功が、「まぐれ当たり」だったかどうか？を出来るならば確認する必要がある。一つの方法としては、似た様な「成功体験」が頻繁に（願わくば、サンプル集合の過半数で）認められるかどうか？を調べる事だ。認められるのであれば、それは「必然」に近いと判断できるし、稀ならば「偶然」かも知れない。[ただしその「体験談」が本当か嘘か？を見極めなければならない。]

長々と書いてしまったが、たった一つの「サクセスストーリー」にあまり考慮もせずに飛びついて、真似をする、というのは非常にリスクの高い行為である、という事を日本人はもっと心に刻みつけておいた方が良い。つまり、

（「サクセスストーリー」の主人公の）「△△さん」は「△△さん」、

自分は自分、であることを忘れてはならない！！

以上、私にとってはあまりにも常識的すぎてくだらない文だが、多くの日本人には新鮮かも知れない。とにかく、これからの時代、「多様性」こそが（人類、国家、あるいは個々人が）生き延びるカギであり、あまり周囲の人々に惑わされずに自分自身の個性を磨き、鍛える事が不可欠になってくるであろう。

合気道＆居合道の”効用”：腰痛・肩コリからおさらばする

江澤　潔 ［手書き： 2021/01/21; 電子文書化：2021/03/23］

以前にも述べた様に、私は合気道を約１１年間、居合道を約４年間程やっていた。（共に二段を取得。）合気道や居合道から受けた”効用”（あるいは恩恵）は色々あるが、その中の一つに腰痛・肩コリ・背筋の痛みからおさらばする、というものがある。しかしながら、これは心がけ次第で日常生活レベルでも実践できる事であるので、実は、合気道や居合道の経験がない人でも「会得する」事ができる。これについて以下に説明しよう。

私が合気道で習った最も大切な事の一つに、「背筋をピンと伸ばしてまっすぐ立つ」という教えがある。合気道の技はどれも「自然体」から繰り出されるもので、この「まっすぐ立った」姿勢が一番効果的な技に移りやすい体勢なのだ。［注：背筋を伸ばす際、胸を張ろうとすると、疲れて長続きしない；骨板後部（腰骨）をピンと立てる様にし、あごを引けば、自然と背筋が伸び長続きする。］ 一方、私が居合道で習った最も大切な事の一つが、「肚（はら、人体の重心、合気道では「臍下丹田（せいかたんでん）」と呼ぶ）を据える」即ち、臍下丹田（へそから約 10 cm くらい下にあるとされる）を身体の中心に置き、かつ低めに下げた姿勢をとる、事であった。

この二つは両立可能であり、合気道や居合道の達人たちは皆、この二つを両立させた体勢で技を繰り出しているハズである。

そして、この２つを日常生活レベルで実践する、即ち、常に背筋をピンと伸ばしてまっすぐ立ち（あるいは座り）、かつ肚を据える、事こそが腰痛・肩コリ・背筋の痛み、から解放された生活を送る秘訣なのだ！！

これに含まれる特に大切なことは、

⑴顔は常にまっすぐ前を向いてあごを引く。何かを見る時にはできる限り自分の目線を見たい物の高さに合わせ、それができない時は、顔はできるだけ動かさずに目線だけ上げ下げする。

⑵肚（臍下丹田）が身体の中心にくる様に、腰（あるいはお尻）を前に出しすぎたり後ろに引きすぎたりせず、肚をできるだけ下げる様に心がける。

⑶何か物（軽い物も含む）を持ち上げる時には、その物が身体の中心のできるだけ近くに来る様に近づいて、両脚を前後に少し開き、後ろ脚のひざを地面につけて、その物を持ち、上体を立てたまま立ち上がる力を利用して持ち上げる。［決して、「背筋テスト」の様に、上体を傾けて物を持ち、上体を起こして持ち上げる、事はしてはならない！！］

この三つを普段から徹底すれば、それだけで、合気道・居合道の達人レベルの「丹田力」を身に付けられるかも知れないが、それはさておき、実質上、腰痛・肩コリ・背筋の痛みから「おさらば」できるハズである。

私が合気道を初めて数年後には、⑴と⑶は実施する様になっていたが、⑵はまだ実施せず（というか、その重要さを知らず）肚が前後する不安定な体勢だった為に技にも力強さを欠き、又、しばしば腰痛に悩まされた。しかし、居合道を始めて数年後に、ようやく⑵を「会得」し、それからは腰痛・肩コリ・背筋の痛みからほぼおさらばできた。［たまにギックリ腰になったりしたが、それはいずれも上記⑴⑵⑶のうちどれかを怠った時であった。］

デスクワークの多い人でも⑴と⑵は実践できる。特に、⑴を実践する為に、机、椅子、パソコンのディスプレイ等の高さを調節する事は重要である。また、料理の際も、特に調理台や流しが低すぎる時は、膝立ちしたり、椅子に座ったりして⑴⑵を心がければ、肩コリや腰痛に悩む事はほとんどなくなるであろう。

現代人の肩コリの原因の上位に来そうなのがスマホいじりであるが、スマホ、あるいは本等を見る場合も、理想的には目線の高さまであげるのがベストであるが、手・腕を

その高さで保つのは至難な為、何か補助器具を用いると良いだろう。［その手の補助器具を考案＆開発してヒットすれば金持ちになれるかも知れない。］もし、補助器具が手元にない時は「次善の策」としてあごを引いたまま目線だけでスマホ／本を見ることとなる。

　腰痛・肩コリ・背筋の痛みは、人間が二足歩行をはじめてからまだ完全にそれに適応しきれてない為に起こるものらしいが、近年、デスクワークが増えるにつれて、かかる頻度が増した「現代病」の一種でもある。ここで挙げた「秘訣」を身につける事により、これらの「現代病」からおさらばすれば、あなたの明日からの生活はバラ色になるかも知れない。

高校時代の思い出：「ドクター江澤」の大失態

～秩父支部劇 1986～

江澤　潔［手書き：2021/01/26; 電子文書化：2021/03/22］

私は高校生時代は秩父から電車で１時間弱程離れた熊谷高校に通った。この高校（略称、「熊高」で「くまたか」と読む）は、公立（埼玉県立）の男子校である。公立の男子校を珍しがられる読者の方々も多数おられるかも知れないが、おそらくその方々は埼玉より「南」に高校時代住んでおられた方々であろう。私が当時耳にした話では、戦前は日本の各地に公立の男子校と女子校が高校（旧制の中等学校）で存在していたのだが、終戦後、マッカーサーのGHQによる「改革」で、南の方から男女別学が共学に置き換わって、埼玉に達する手前でその「改革」が終わってしまったとの事である。

さて、恐らくどこでもよくある話だが、男子校というのは（異性に見られていない解放感からか、異性がほとんど学校にいない事に因る欲求不満からかは判らないが）かなりクセが強く、私が通っていた熊高も、その地方では「変態の学校」として名が通っていた。実際、学校内では淫語が飛び交い、全校レベルで行われる弁論大会の題名からして放送禁止用語が散りばめられた、恐るべき学校であった。さて、そんな校風を背景として、私も所属する「秩父支部」では、３年生になると文化祭の時に「秩父支部劇」（略称「支部劇」）なるものを公演するのが「しきたり」であった。そして、この支部劇の主人公（あるいはヒーロー）は、いつも決まって「キトーマン」なる人物（サイボーグ？アンドロイド？）であった！！こんな所からも、この支部劇の内容がどんなものか、ある程度察しがつく事だろう(^^;)。

そして、私が３年生になった1986年の秋も、例年通り支部劇は公演され、その年は、内容の詳細は忘れたが、水戸黄門（「見て！コーモン」だったかどうかは覚えていない）の話にキトーマンを絡めた物語だった様なおぼろげな記憶がある。

当然のことながら、私もその支部劇に参加（というか出演）したのだが、幸か不幸か、（最初から最後まで出る）メインキャラクターではなく、ある一場面だけに出るチョイ役だった。（なぜこれが「幸」かも知れないかは後ほど明らかになる。）その場面とは何かと言うと、この年の支部劇では、新たなメインキャラクターとしてキトーマンの息子の「コキトー」なる者を登場させたのであるが、それが設定上、初めはホーケーで、手術

をして被っている皮を切除する、という場面があり、その手術を手がける医師の役として、私が抜擢されたのである。［ちなみに役名は「ドクター江澤」、、、私が（1996年３月に）一つ目の博士号を取る１０年前に、（役柄とはいえ）私は既に「ドクター」を名のっていたのだ！！］そして、この手術をする前にホーケーについて短い講義をする事になっていた。

　生真面目な私は、この役を立派に演じるために、日夜、学校の図書館に通い、ホーケーについて調べ勉強し、講義の内容を堅めていった、、、この、生真面目さが裏目に出るとも知らずに、、、。そして、「口で説明するだけでは分かりにくいだろう」ということで、友人のＴ君と男のサオの形をした着ぐるみを製作し、Ｔ君に中に入ってもらって、その着ぐるみをモデルとして示しながら説明する事にした。この様に「準備万端」で臨んだハズだったのだが、、、いざ、出番になると、私は緊張していたせいもあってか、頭の中が真っ白になり、覚えていたハズのセリフがすべて飛んでしまった！！

そして、しどろもどろしていた所、進行の都合もある為、用意した「講義」はすべてカットされてしまい、すぐに「コキトー」のホーケー手術へと移った。、、、Ｔ君、ゴメン(ＴＴ)、、、。その際、当初は白衣を脱ぐと、レオタードを着たグロい姿が露わになる予定だったのだが、準備が間に合わず、仕方なく、黄色いタンクトップに紫のホットパンツという派手ながらもインパクトに欠けた格好を披露することとなり、ここでもギャグの「ツボ」を外してしまった、、、orz。それでも気を取り直して、最後の「見せ場」として、体操部で練習を重ねていたバック宙（後方宙返り）を決め、一瞬だけ観客を「オッ」と言わせて、「コキトー」に走り寄って被っている皮を剥いだ。

　これで、私とＴ君の出番は終わってしまったが、この支部劇での出来事は苦い経験として、その後も私の脳裏に住み続けた。実は、私は中学生の頃は「平家物語」をそらんじる等、記憶力はかなり良かったのであるが、高校に入ってから記憶力は低下の一途をたどり、国語の課題で出された百人一首の暗唱もままならない有様であった。そういった点をきちんと念頭に置いて臨まなかったのが、今回の最大の「敗因」と言えよう。私はその

後、大阪大学に入り、合気道部に所属して２年の際に行なった「コンパ芸」での出し物としての寸劇でも、セリフを覚えるのに難儀した為、いつもほとんどセリフのない役ばかり任されていたが、その最初の「はしり」がこの秩父支部劇 1986 だったのかも知れない。

しかしながら、「講義」を途中でカットした進行係の英断には感謝している！；もし、あのままにしどろもどろを続けていたら、支部劇全体に悪影響を及ぼしていたであろう。その一方で、せっかく着ぐるみを着て頑張ってくれたＴ君の苦労に報いることが出来なかったのは、痛恨の極みであった。、、、改めて、Ｔ君、ゴメン！！、、、とは言うものの、最後のバック宙をして、スベリッ放しで終わるのを防げたのは、唯一の「すくい」だったと言えよう。体操部に入って約２年間行なった練習のうち、柔軟体操と筋力（特に瞬発力）トレーニンブ以外で、実際に役立ったのは、このバック宙が最初で最後だったかも知れない。、、、あの時ばかりは、「体操部で活動していて、本当に良かった」と思わずにはいられなかった。

この熊高に通った３年間で、クラブ活動絡みや（体育祭、スポーツ大会、文化祭、修学旅行など）レクリエーション活動絡みの思い出はちょくちょくあるが、私の記憶には、この秩父支部劇 1986 での大失態が最も鮮明に残っている。[15] それは、体育館が満杯になる程の大観衆の前で演じた事と、私が高校時代に犯した失態のうちでも恐らく最大級のものであった事との相乗効果によるものであろう。

私の当時の同級生、特に秩父支部の同級生達がこの高校生時代にどんな思い出を持っているかも興味深いものであるが、もし仮にそのうちの誰かが私に「一番思い出に残っている事は？」と尋ねたら、私はきっと、この秩父支部劇での出来事を話す事になるだろう。

---

15 あともう一つ挙げるとしたら、それは、拙著「ある『負け組科学者』の人生の記録」の補遺Ａで懺悔（ざんげ）した、あの、体育祭での「楽しくやろうぜ！！」事件である。

「命を大切にする」とは？

江澤　潔　［下書き：2021/01/29; 電子文書化：2021/03/26］

「（自分の）命を｛大切（大事）にしろ, 粗末にするな｝ヨ！！」

これは、（大抵の場合）若者が（自分よりも年上、あるいは目上の人から）よく言われる戒め（あるいは「たしなめ」））の言葉である。こう言う言葉を、我々は普通、

「無茶な（あるいはリスクの高い）行動はできるだけ避けて、

できる限り生きながらえよ」

と解釈する。

はたして、これが本当に「命を大切にする」ことになっているのか？

あるいは、これ以外に「命を大切にする」やり方はないのか？

というのが今回の主題である。

議論を進めやすくするために、まずは「命」を「お金」に置き換えて、「お金を大切にする」事から考察する。「お金を大切にする」と聞くと、我々日本人は、大抵、

「（一生懸命働いて）コツコツとお金を稼ぎ、できるだけ使わないで貯金する。」

事を想起する。まあ、前半部の「コツコツとお金を稼ぐ」部分は良しとして、「できるだけ使わないで貯金する」ことが本当に「お金を大切にする」事なのだろうか？

お金の本来の機能は、（ほぼ）いかなる物品とも交換できる事である。例えば、もし仮に一生、お金をできるだけ使わずに貯金したら、確かにその人は大金持ちにはなれるかも知れない。しかし、それで結局、（仮に）一銭も使わずに一生を終えたら、この人はお金の本来の機能を全く活用しなかった事になる。もしそれが、「タンス預金」や「秘密の金庫」や「秘密の壺」にでも保管されていて、そのありかを他の誰にも知られずにいたとしたら、その人が一生かけて稼いだ大金は、陽の目を見る事もなく永遠に「眠る」事となるのだ！！

仮に、遺言書に、そのありかと相続人が明記されていれば、少なくともその大金は相続人に引き継がれる事とはなるが、それでも、そのお金を貯めた本人自身の「益」となる様には使われなかった、という事実は厳然として残る。もし仮に、そのお金が銀行に預けられていたとしたら、確かに銀行はそのお金を利用して融資等ができるが、その預金した本人に直接「益」となる様な使われ方は普通しない。［同様な事は、株式や債権等、証券への投資にも言えるが、こちらは自分の信条や趣味に沿った形で投資すれば、一応もう少し「自分の為に」お金を使った事にはなるかも知れない。］

結局のところ、お金とは「使われてナンボ」な代物なのだから、ただ、預金するばかりで使わないでいたら、それは「お金を大事にする」事にはならないのではなかろうか？

言い換えれば、（今の社会体制の下では）コツコツお金を稼ぐ事は大切だし、それを預金利子や株式の配当等、投資でお金を増やす事自体は別に問題はないものの、それだけが目的化してしまい、お金を自分（の目的）の為に使わないのであるならば、それは、お金稼ぎのスゴロクゲームやテレビゲームをやっているだけと大差なくなってしまう！！

つまり、「最終的には（何か）自分の目的の為に使う」という行為をやって初めて、「お金を大切にした」事になるのではなかろうか？

と言う訳で、今回の主題の「命を大切にする」事を考えよう。

　　別の考え方をする人々も多くいる事を承知の上で、敢えて申すと、私は、「お金」同様、「命」も「使ってナンボ」だと思っている。言い換えれば、何の目的も大義もなしに、ただ、無茶な事を避けて生き長らえても、それは、稼いだお金を「タンス預金」している様なもので、もしそのまま何もせずに一生を終えたとしたら、結局、それは始めから生まれなかったも同然ではないのか？

　　比喩を用いて言い換えるならば、それはあたかもシケた線香花火が長くくすぶり続け、一度もパッと光る事なしに終わってしまうかのごとくであり、「命の残念な使い方」になっている様に私には思える。［その人が、仮に、誰でも簡単にできる趣味や道楽に興じていたとしても、ほぼ同様の事が言える。］

　　又、「無茶な事をできるだけ避ける」のは決して悪い事とは思わないが、それを続けたまま一生を終えるのも、私にはもったいない気がする。何か野望（あるいは大志）を持って生きていれば、人間、一生に一度は「（自分の）命を懸けるべき瞬間」が訪れるものである。そこで、手をコマねいて「安全策」を取り続けていると、結局、（先ほどの）シケた線香花火の様な一生で終わりかねない。

　　「命」も「使ってナンボ」のものだとするならば、少なくとも一生に一度は「大バクチ」を打って、自分の命を懸けて見たいものである。

　　人間は神ではないので、未来の事を１００％正確に予知（予想）するのは無理である。だからこそ、「バクチ」を打つ事に意義があるのだ！！

　　そうやって、（文字通り）「命を懸けて」散って行った人々を、「無鉄砲な愚か者」と蔑（さげす）むのではなく、「リスクを懸けた勇者達」と敬ってあげたいものである。［とは言え、私とて、あちこちで何でもかんでも命を懸ける様な「危うい生き方」は

勧めない；むしろ、普段はできるだけ慎重に事を運び、ここぞと言う時には命を懸ける様な生き方を推奨する。]

まとめると、

「命」も「使ってナンボ」のものだとしたら、
後生大事に「タンス」（あるいは「秘密のツボ」）に「しまい続けて」おかずに、
人生を左右する「決定的瞬間」が来たら（文字通り）「命を懸けて」行動する事こそが、
真に「命を大切にする」事なのではなかろうか？

というのが、今回、私が主張したい事である。

[補足：「石橋を叩（たた）いて渡る」のは結構だが、「石橋を叩いても渡らない」のは単なる臆病者か、「命を大切にする事」の真意をはき違えたマヌケである、、、と私は思う。]

「囚われの身」最終回

江澤　潔［手書き：2021/01/30; 電子文書化：2021/03/20］

入院してから約３ヶ月経ち、私も退院できる運びとなった。

言っておくが、私は今も考えは変えていない。即ち、できる限り早くこの世を去り、私の「誠実（まこと）」を貫く所存である。

では何故、病院側が私を退院させる事にしたかと言うと、私の診断を改め、「私は精神的に病んで死のうとしているのではなく、ただ、『そう決めたから』死のうとしているのだ」と結論したからである。今までの間、病院側は私の自殺願望には実は「うつ病」が関わっている可能性を疑っていた。そこで、私は抗うつ薬を毎晩服用し、それによって作業のパフォーマンスが向上するか調べられていた。結果、著しい（つまり有意な）パフォーマンス向上は見られず、更に、仮に今更パフォーマンスが向上しても、私が過去にした「約束」（又は「宣言」）は取り消すことは出来ず、従って、私の自殺の意向が覆るものでもない事を理解した為、これ以上精神科での「治療」を続けてもあまり意味がないと結論したのだ。

かくして、私の３ヶ月余りに及ぶ「囚われの身」状態は終わりを告げることとなった。私は、病院側の「英断」に深く、心より感謝する。

本当は、退院してすぐにこの世を去りたいところではある。しかしながら、入院中に（特に学習関係の）手記を数多く書き溜めてしまった為、私にはこれらの手記を世に公開する責務が生じてしまったと感じている。従って、退院してからできるだけ早くこれらの手記を電子ファイルに「清書」し、「製本」して、パブリック・ドメインとしてインタ

ーネットで公開するつもりである。これが終わり早々、私は改めて、この世を去るべく「決行」しようと思う。それまでしばしばお待ち頂ければ幸甚である。

マウンティングとクソバイス

江澤　潔　[電子文書書き下ろし：2021/03/28-31]

「マウンティング」とは、元々は、サル等の霊長類に見られる行為で、（サルの）社会的に上位の個体が下位の個体に馬乗りすることにより、社会的序列の確認をする事を言うらしい。ヒトも霊長類である以上、「マウンティング」をするが、それは大抵、自分よりも「劣っている」ハズの相手に対して、「私はおまえ（あるいはあいつ）よりも○○である！！」と自分の優位性を示す様な言葉（や態度）をぶつける行為の事を言うらしい。

　私は何故か、このマウンティングをよくされやすい様に思う。特に最近受けたマウンティングは、私が、体調不良を主な原因の一つとして、研究者の職を引退したり、学会の不参加を決定したりしたときに、よく被った。一言で言ってしまえば、

　「私（あるいはあの人）は、あなたよりも重篤な病気（あるいは深刻な状況）

に苦しんでいるのに、こんだけ頑張っている。

（だから、あなたも頑張れ！！）」

といった類の、いわば「叱咤（しった）激励」（あるいはその「一歩手前」）である。（つまりは実質的に全く役に立たないアドバイス、称して「クソバイス」とも言うらしい。）私は、この様なマウンティングをしてくる様な人々には、他人にアドバイスする資格はないと思う。何故なら、そういった人々は、「他人の痛み」を分かってあげられないからだ。

こういう時に重要な事は二つある：（1）「病気」あるいは「苦難」には、単に見た目（あるいは語られた状況）（あるいは（病名も含めた）一般的分類）だけでは十分に判断仕切れない、「深刻さ」のレベルが存在する、ということ（特に、語った人が（私の様に）口下手ならなおさらである。）；そして、（2）仮に「病気」あるいは「苦難」の「深刻さ」のレベルが同じだとしても、個人々々が持つ（当該問題への）「耐性」は千差万別であり、この「耐性」も考慮に入れなければ、本当の意味でどちらが「深刻」な状況に置かれているのかは判断できない事、である。

私のケースで言えば、私はその（私の「耐性」を上回るほど深刻な）「苦難」の為に、既に「引退」に追い込まれたが、それに対するマウンティングをした本人（あるいはそれに引き合いに出された人物）はいまだ「現役」でバリバリ働いているという「事実」を考えれば、「耐性」も考慮に入れた上では、私の方がより「深刻な」状況なのは、一目瞭然であろう。そういう事も考慮せずに、無神経（かつ無責任）にあれこれアドバイスしてくる様な事は、もういい加減やめて欲しいのである。日本に、この様に、「苦しんでいる人々」の「心の痛み」や「苦難」の（見かけでなく）実際の深刻さを理解する事なく、無神経にマウンティングやクソバイスをしてくる様な人々がはびこっている限り、「不登校」や「引きこもり」等の社会問題が根本的に解決することは到底無理だろう。

私は小学生の頃から、「疲れやすい」体質等で、その事でそれからずっと悩んでいた。（その体質のせいもあって、他人からは「元気がない」と思われる事もよくあっ

た。）最近になって、「睡眠障害（多眠症）」と診断され、それと「疲れやすさ」等が関係あるかもしれないと疑う様になった。また、私は数学、プログラミング、英語等がそこそこ出来ることは認めるが、それはあくまでも、人一倍以上の努力＆苦労をして来た結果であって、「才能」があるからでは決してない。だから、何か新しい事を習得または達成するのには人一倍時間がかかってしまうのである。これらの事情も考慮せずに「頑張れ！！」とか言われてそれに応えようとした事も過去に幾度かあったが、大抵の場合、（全力でやったにも関わらず）相手の「期待」を裏切る結果となった。

　他人にアドバイスしたければ、（相手の言う事をよく聞いて）彼（女）の置かれた状況を十分に知り、その上で、（「耐性」も含めた）彼（女）の性格・能力・適性等を十分に踏まえた上で責任を持ってして欲しい。これは私から読者の皆様方への真摯なお願いである。

[実は、私自身も過去には「マウンティング」や「クソバイス」をしてしまった事も幾度か（恐らく数える程だけ）やってしまった事がある様な気がする。そのことに関しては、この場を借りて、心からお詫び申し上げる。]

ヒトの「天寿」

江澤　潔　[電子文書書き下ろし：2021/03/28-31]

よく、「天寿を全うする」という言葉を聞いたりするが、そもそも「天寿」って何だろう？と疑問に思った。辞書（goo 辞書）で調べてみると、

天から授かった寿命。自然の寿命。

とあった。一方、いつぞやの「チコちゃんに叱られる」（確か「何故カメは長生きか？」の件）でやっていたが、

心臓の拍動数から割り出した人間の平均寿命の推測値は約３５年

だそうである。言い換えれば、「母なる自然」が人間の為に用意しておいた寿命、すなわち、ヒトが「天から授かった寿命」は３５年と言うことになる。これは、現在の日本人の平均寿命から比べると著しく短いが、縄文人とかの推定平均寿命はだいたいその程度だったとも言っていた気がする。つまるところ、現代人は、医療、食事、衛生環境等に「手を加えて」、「天から授かった」寿命を無理やり引き延ばしているのだ、とも解釈できる。恐らくはこの「副作用」が、最近の（二人に一人はかかると言われている）ガンの高い罹患率や、認知症等の諸問題であろう；「母なる自然」から見れば、こんなにヒトが長生きするのは「想定外」だった、と言う事なのかもしれない。

　この事を踏まえれば、（あくまでも「平均」であって、実際にはかなりの個人差もあるのかもしれないが）、一人のヒトが３５歳まで生きたら、死因が何であれ、それは「天寿を全うした」と言えるのかも知れない。

［補遺］私の死生観

江澤　潔　［手書き：2021//01/11-12; 電子文書化：2021/03/26-27］

１、死生観（私の考え[16]）

１．１

「死」は不可避である（誰でもいずれ死ぬ）ばかりでなく、

　　不可欠である（次世代以降に資源や活動の「場」を譲る為）。

→ 生物個体には、各々、適正な「死に時」がある。

１．２　人の「適正寿命」（＝「死に時」）

、、、次のうちで長い方である：

A) 生物学的寿命（「子育て」が終わった時）

、、、子供を産み、それが十分育った時；

B) 社会的寿命（「社会的役割」が終わった時）

、、、自らの社会にもたらす「恩恵」が、

社会に課す「重荷」を不可逆的に下回った時。

＊これらが何歳になるかは個人毎に異なる。

＊ただし、病気、ケガ、事故等で命を絶たれた場合は致し方ない。

16　５０余年の人生に渡って築かれたもので、恐らくもう大きく変わる事はない。

[私の考え] 上記「死に時」を過ぎたら、「人生の希望引退」をしても良いのでは？

[注１] 本来は「人が行き過ぎた医療に頼らずに、自然に生きられる間」でよかったのだが、

昨今の人類による自然・環境破壊、また、高齢化による諸問題の噴出により、「少し厳しめ」な基準に変えた。

[注２] 私個人は、２０代の頃は、自分は３０～４０歳くらいまでに大きな研究をして死ぬ、

と思っていたのだが、自分の実力不足のせいで、それがズルズルと延び、気づいたら５０歳を過ぎていた。

２、私の死生観の形成に影響を与えた事物

i.　老子・荘子の教え（「道教」）

、、、「無為自然」な生き方　（「行き過ぎ医療」の対極）

ii.　武士の精神、、、切腹（誇りある死）

＆幕末の志士達の「生き様」

、、、大抵、若いうち（２０、３０代）に何かを成し遂げ（かけ）て死んだ。

iii.　自然との触れ合い＆自然を題材にしたテレビ番組

、、、動植物達は皆、自らの「死に時」を心得ている。

（＊心拍数から推定される人間の平均寿命は約３５歳である！！）

iv.　（特に産業革命以後の）

（公害も含む）人間による大規模な自然環境破壊

、、、既に、人間活動は「母なる地球」の受容力を超えた！！

、、、「過ぎたるは及ばざるが如し」、、、

v.　日本における高齢化による諸問題

・巨額の年金＆医療・介護費　→ 財政赤字

・ガン、認知症、寝たきり老人、老々介護、８０－５０問題、etc.

、、、要は、皆が高齢になる前に（人生を）「引退」すれば、これらは起こらない。

vi.　「行き過ぎ医療」の問題

・（主に老人達への）「薬漬け」医療（→ 巨額の費用、過剰な長寿化）

・植物人間、寝たきり老人等への行き過ぎた「延命」治療

、、、本当に必要か？「安楽死」させられないのか？

vii.　私自身の体調不良（疲れやすさ、だるさ＆頭重感、めまい、etc.）

viii.　生物学（特に進化学）の知見

、、、人間は他の動植物や細菌達と祖先を共有している！！

→「命の尊さ」への疑念（人の命　≈　細菌の命）

３、私の「死生感」の変遷

（１）幼少期～小学生頃（？）（０～１２歳頃）

他の人々と同様、死ぬのが怖く、長生きしたかった。

（２）中学生～阪大大学院生の頃（１２歳～２７歳頃）

はじめは（1）とほぼ同様だったが、

- 身体の故障等が多発し、又、

（恐らく）睡眠障害等の障害（特に「身体がだるい」「疲れやすい」）が起き始め、

生きる事のつらさ、および「死」を意識し始める。

［漠然とだが、大体３０歳前後には死ぬだろうと思っていた。］

- 自然を題材としたテレビ番組等で、

（全体としての）人間の横暴さ＆傲慢さを意識し始める。

- この頃から、老子・荘子の思想や武士の精神＆生き様に関する書物を読んだり、

テレビ番組を視聴したりして、感銘を受けた。

（＊　一方で、自分は研究者として飯を食って生き続けるのは恐らく無理だろうとも予想していた。（研究者としてのセンスや才能の有無の問題））

（３）基研～名大～遺伝研（前半）（２７～３５歳頃）

- 働いて金をかせぐ辛さを知る。
- 大阪大学での恩師（吉川圭二博士）との「誓い」

「生命科学の分野で大活躍する」

、、、これは何としても果たさねばならない！！（＝「それまでは死ねない！」）

- 名大での思わぬ研究結果と指導教官との確執

→「一つ、自分の力で大きな仕事（＝研究）が出来たら、

それで終わりにしよう。」

［注：ここでの「終わり」は研究人生の事であるが、

自分の身体がそれまで保つのか分からなかった為、

「人生の終わり」の意味合いも多少含む。］

（＊大体、４０歳頃までには死ぬと予感していた。）

（4）遺伝研（後半）（３５～４０歳頃）

- この頃から進化学的知見を意識し始める。（人の命　≈　細菌の命）
- 巨大プロジェクトへの参加

  → 過重な職務　→ たび重なるサービス残業＆徹夜

  => 体調を大いに崩す（細菌性胃腸炎、帯状疱疹、頭重感＆めまい、etc.）

  、、、吉川博士との「誓い」を果たす為、なんとか精神力だけで持ちこたえた。

  、、、が、「死」をかなり間近に意識する。、、、「いつ死んでもおかしくない」

（5）UH（ヒューストン大学）～葉山（４１～４４歳頃）

- UH で体調が多少回復するも、葉山で再び崩す。

  ［恐らく UH での「宿題」を勤務時間に行なっていた為］

  => 「死」をいよいよ意識する

  → 「次が最後（最期）！！　これより先はない！！」

＊この頃から自然災害も次第に激甚化し始め、

「人類の横暴をストップさせねばならない！！」と本気で思う様になる。

＊この頃（あるいは（4）の頃）から見たニュース番組で

高齢化問題を意識し始め、

「何故、人間はこんなに長生きしなければいけないのか？」と疑問に思い始める。

＊この時期の終わり頃、母や吉川圭二博士等が他界する。

（6）九工大～秩父（４４～５２歳頃）

- いよいよ最後（最期）の研究プロジェクトに取り掛かる。

（終わっても、終わらなくても死ぬ覚悟をする。）

＊様々なニュース番組や解説番組やドキュメンタリ番組等を視聴し、

どうも（かつての）欧米型の「拡大 → 海外進出主義」に根ざした社会

のあり方そのものが地球環境破壊の元凶である！と思い至る。

=> 環境、そして人類の未来を守るために、世界的に人口減少＆活動縮小すべきだ！！

- 私の最後（最期）のプロジェクトへの元上司達の「妨害」を少しでも減らす為に、

  彼らに私の「死の覚悟」を伝える。

- 秩父で様々な病院にかかって、私の体調不良（主に頭重感、めまい）の原因を

  調べ、睡眠障害が見つかる。

  => 大野原のアパートで２年間、療養しながらも研究を続ける。

  [２年で実家に戻ったのは、既に「死の覚悟」をしていたので、そのままアパートに居ては、そこが「訳あり物件」になってしまう為である。]

- アパートから戻って半年で（研究を）終わらせるつもりが終わらなかったので、

  あと４ヶ月「期限」を延長し、「できなければ切腹して果てる」と家族に宣言する。

=> 2020/10/30 「期限」を大幅に超えてようやく「すべて終わった」ので、

  当初の予定通り「決行」を図るも失敗、病院の精神科に強制入院させられる。

４、まとめ

私の「死生観」は、そのコア（芯）は老子・荘子の「無為自然」の思想と武士の精神および幕末の志士達の「生き様」に影響されて形成され、それに自分自身の体調不良や人類

（全体）による自然環境破壊および日本での高齢化による諸問題に関する真剣な考察および生物学（特に進化学）的知見により、洗練されていった。

ざっくりと言えば、

(1)　「死」は（人間社会や生態系の正常な「新陳代謝」の為に）不可欠である！！

(2)　人には「死に時」があり、それを過ぎれば

（人生からの）「希望引退」もありではないか！？

というものである。ここで「死に時」は、

(A) 自分の子育て期の終わり、又は
(B) 社会への貢献が社会に課す重荷を不可逆的に下回った時、
のどちらか後の方

である。

しかるに、私の場合、その「死に時」を５０歳前と予想し、それまでに終えるつもりの「最後（期）の研究プロジェクト」を無事終えるかその前に力尽きたら死ぬ、と多数の筋に「約束」（又は「宣言」）しているので、私はそれを果たすことにより、自分の「誠実（まこと）」を貫き通し、「誇り」を守る所存である。

私にとっては、

「誠実（まこと）」や「誇り」は生き長らえる事よりも重要である！！

［提言］　人生、のんべんだらりと長生きするよりも、
「ゴール」を定めてそこまで「全力疾走」した方が、楽だし生産的ではないか？
=>　「先ず、隗より始めよ」